

---

# 壁伝いISOS

都宮 京奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

壁伝いSOS

### 【Nコード】

N8968Z

### 【作者名】

都宮 京奈

### 【あらすじ】

犯した覚えのない父殺しの罪で実刑判決を受けた久手は、医療刑務所に移送される前日、ある少女と面会する。久手は少女から「布団に入り夢を見る」と助言され、『はじめに』というタイトルの文章を書き残し眠りに着く。そして醒めることのない眠りの中で長い夢を見る。

夢では二人の少年がそれぞれを助け出すために奮闘していた。遠藤圭という少年の過去を思い出す姿。御名風ハルという少女が遠藤圭を助け出す姿。二人は互いを救い出すことができるのか。

## はじめに

はじめに

この物語は非常に複雑に入り組んでいる、荒唐無稽な小説群です。筋を説明すると、高校生である主人公が自分の作り出した少女に心を救われる、という至極簡単な一本道ではあるのですが、何ぶん主人公が少女に救われる過程というものが前代未聞なのです。

これを北海道の南にある刑務所の獄中で書いている私自身、どうして選択肢を間違ってしまったのかという疑問で頭を痛めてしまうのですが、こうなった以上は仕方がない。読者に裁量をお任せしようと思ひ、こうして不本意ながらもお詫びを告げる章を設けた次第です。

さて、この話を読み進める前にひとつだけ、書かなければならぬことがあります。

それは、何が虚構で何が現実なのか、作者である私自身理解できていないということです。

きつとこの文章を読み進められている読者様たちは、小説で起きる数々の出来事を嘘か真か各々に備わっている慧眼で審議するであろうと思ひます。ですが、それは止めたほうがいいと進言しておきます。

なぜなら私には過去が無く、その無い過去を思い出すためにこうして文章を綴っているからです。つまり、まったくの嘘かもしれないということなのです。

もちろん中には私自身が経験した真実も含まれていますが、その経験も嘘かもしれない、誰かに創られた世界かもしれない可能性があるのです。

私は犯してもいない父親殺しの罪を償うため、存在しているのか定かではない自分の半生を振り返るべく「犯罪はこのように起きて

しまったのではないか」と仮説を立てて獄中にて小説を執筆しています。

実を言いますと、こうして書いている私自身、誰かに書かれることよって創られた人物なのではないかという疑いの念を晴らせぬまま、手の動くままに文章を書いています。

私はどこの誰で、どうして謂れない罪を着せられてしまったのか、まったく合点が行かぬまま、それでも警察の方に突きつけられた父親殺しの罪を認めようと尽力しております。

もしかしたら私は空白の存在なのではないかとも考えました。

ということは、誰かに経歴や人生観を書かれなかったのではないかと思っております。ですから、できれば誰か、読んだ誰かしらの手で私の経歴を、この紙の隅にでも書き付けてくださることを祈っております。

そのような諸々の理由から、読者様たちは出来るだけ頭を空にして、文章を読み進めていただくことをお願い申し上げます。

また、恥ずかしながら、下に明記する署名は私が以前から使用していた筆名です。

この物語が私の過去となるよう祈りを込めて。

久手くで  
贄緒にえお

## 誰かが書いた短編 倉庫娘

あなたは八歳の娘を亡くしました。

交通事故でした。

大事な一人娘を、与り知らぬところで亡くしてしまったのです。

ちょうどそのとき妻と折り合いが悪かったので、事故をきっかけにして別れます。

独り身は寂しいものでした。家庭の癒しの場として購入した庭付き一戸建ても……一人で暮らすにはとても広く感じられて、手放すことに決めました。

引越し先は、庭付き一戸建てとは違ってとても狭いですから、持ち込める荷物も限られてきます。別れた妻は自分の荷物だけを持っていったので、荷物はあなたのもので、娘のものだけでした。

あなたは悩みます。生前、娘が着ていた服や遊んでいた玩具の数々を捨てようか どうしようかと。

アルバムぐらいなら思い出として取っておくことができますし、何よりも場所をとりませんから持って行くことができます。ですが、服や玩具となると話が違ってくる。娘に買い与えた服と玩具はかなりの量で場所をとってしまいます。

……とはいっても娘が触って着て遊んだ実物です。

あなたは捨てられません。荷造り用の箱に大事に仕舞っておくのです。

引越し先は、一人で暮らすには丁度いい狭さでした。六畳一間しかなくとも生活する分には困りません。なにより、もう娘はこの部屋にはいないのですから、娘と遊ぶ部屋も本を読んであげるだけの大きい布団もあなたには必要ありません。

……あなたは荷物を箱から取り出して、整理を始めます。家具や家電、そして衣類を四方に置く。最後に娘の服と玩具を床一面に広げ、分厚いアルバムを敷き布団に広げます。

布団に腰を下ろし、分厚いアルバムを最初の頁から順々に捲っていきます。

娘の可愛い写真一枚一枚をじっくり見ては、頭の中で思いだし思いだし目を細めます。

アルバムの最後の頁を捲ると、真っ白な頁にたどり着きます。娘との思い出旅行もこれでお終いです。途中で列車から降ろされたあなたは、足を動かすことはできません。次の列車には乗れないのです。

さて、あなたは空腹を感じました。

財布を手に取り、近場の飲食店へ向かうことにします。

着いた飲食店は賑わっていて、繁盛している様子です。慌しく右往左往している店員を横目で見て、席を探すことにします。

店内を見回すと、ぽっかり空いている四人掛けの席を見つけました。あなたは空いた席に向かいます。

あなたが座ろうとしている席の後部席には、二人の男が向かい合わせて座っていました。男たちは楽しそうに談笑しています。一人は大柄な男で、その体躯に似合わない高い声でひきつった笑いを漏らしています。もう一人のほうは、長い髪をだらしく垂らしている細身の男で、大柄な男の話聞きながら氷をがりがり噛み砕いています。見るからに、嫌な感じ。

席に座り定食を頼むと、やることもないので宙に視線を彷徨わせました。楽しそうな話し声と、明るい曲調のBGMの雑音が周りにあふれていました。

ふと、あなたは思いつきます。そして紙ナプキンを取り出しました。

長方形の紙ナプキンを丁寧に正方形にちぎり、鶴を折り始めます。一回一回慎重に紙ナプキンを折り折りして、できあがった鶴をちよこんとテーブルの上に座らせます。とても小さい鶴はじつとテー

ブルの上に倒れないように座っています。

机の上の鶴が寂しくないように、もう一つ鶴を折ろうと紙ナプキンに手を伸ばしたときでした。

「それで、倉庫娘は元気か？」と大柄の男が言いました。

あなたは、後から聞こえてきた言葉に含まれている単語の、聞きなれない響きに戸惑います。

「倉庫娘」とはなんだろう。

紙ナプキンを正方形に切り取りながら、あなたは『倉庫娘』とは何かを考えます。

「こんなところで……え？ まあいいです。元気といっても客層が客層ですから。ほら、品質管理が大事でしょう？ ニーズに答えるのは想像以上に骨が折れますね」長髪の男が答えます。

折り紙を慎重に折り折り……。

「なるほど。でも信じられないよな。わざわざそんなものに高い金払うなんて。俺には価値のあるものには見えないけど。処理も大変だろう？」

「今日も会いに行くのですか」

「……お前もくるかい？」

あなたは「処理」という嫌な単語が耳について離れません。

二つめの鶴を折り終わり、一つ目の鶴の横に並べました。ちょうどウエイトレスの声がして、定食がテーブルに置かれます。

「本当にこの定食でよろしいですか？」

……すでに『倉庫娘』は、あなたの中で逃れられない呪いの言葉のようになっています。どんなものなのか知りたい。何をしているのか知りたい……ぐるぐると頭の中をその言葉が走り回って止まりません。

どんな可愛い顔をしているのか……あなたの中の『倉庫娘』は、亡くした娘の顔になり、無邪気に笑いかけます。

後の席に座っていた大柄な男たちは立ち上がり、お会計をするためにレジの方へ歩き出します。

「本当にこの定食でよろしいですか？」

二人組みの後を追うのです。早く、ほら急いで。

気づけば外は暗くなっていました。鴉の鳴き声がかかります。

二人が着いたのは、港のはずれにある倉庫群でした。

いくつもの倉庫の間を抜けて歩き続ける二人に見つかからないように、倉庫の壁に隠れながら後を追います。

辺りはとても静かでした。男たちは一番奥の小振りな倉庫の前に立ち止まると、周りを何度も見渡して、扉の近くの装置をいじめます。あなたはまじまじと小振りな倉庫を見つめました。

倉庫は灰色に塗り固められています。目を凝らしてみると、ところどころ塗料が剥がれ、それでも無口に聳え立ち、体の中の荷物をしっかりと見守っているように感じました。

きつとあの中に「倉庫娘」は居るんだ。胸が高鳴るのを抑えようと、口に溜まっているどろどろの唾を飲み下します。

痛々しい声を上げながら扉が上がりきると、二人の男は倉庫の中へ、まるで吸い込まれるようにするりと入りました。あなたは胸の鼓動をいくつか数えてから、扉に近づき、そつと中を覗き込みます。まず最初に二人の男の背中が見えました。大柄な男は大きめのごみ袋を持っています。長髪の男は青いビニールシートを豊んでいました。そして二人は何かを見下ろすようにしゃがみこんで話し合います。

倉庫の中はとても簡素な作りで、壁の左右に大きさのバラバラな角材が積み重ねられているだけです。どうやら「倉庫娘」は二人の背中で隠れているのだろう、そう考えて二人の背中の奥に目を向けます。

……ですが、上手い具合に隠れてしまっていて、二人が見下ろしているモノが何かわかりません。

もちろん、あなたは二人が見下ろしているモノは「倉庫娘」です。そして、どうしても娘をあなたは見たいのです。ですから、二人に



気づかれないように慎重に体内へと踏み込むのも当然ですし、壁に置いてあった丁度いい角材を手にして、きつく握り、それを二人の頭頂部に振り下ろすのも当然ですよ。

あなたはやっと、「倉庫娘」と対面を果たすことができました。

気がつくと、あなたは娘と一緒に布団の中で眠っていました。

腕の中で眠っている娘に口付けをすると、あなたはいそいそと押入れに向かいます。

お目当てのカメラを手にして、眠っている娘の布団の中に滑り込みシャッターを切ります。上手く取れているか心配なあなたは、立て続けに二回目、三回目とシャッターを切り続けます。

これでアルバムを完成させることができます。嬉しくなったあなたは、娘を起こすことにします。

さあ、朝だぞ。起きなさい。

娘は寝ぼけ眼を擦りながら上半身を起こします。

「ばば。もう朝？ 眠たいよう」

寝坊すけさんだな。今日は二人で出かけよう。動物園がいい？ それとも遊園地？

「わあい！ どっちも行く！」

両手を上げて喜ぶ娘を見て、あなたは娘が何も身に付けていないことに気づきます。

床に散乱している服を手繰り寄せ、娘に着せることにします。

「ねえ。ママは一緒にいかないの？ ままも一緒じゃなきゃイヤだよ」

あなたは困ってしまいます。妻とは離婚してしまったのです。どう言おうか思案しながら、娘の着付けを終えると、

我がまま言わないの。そんなこと言ったらどこへも連れて行かないぞ。

誤魔化すことにしました。

「ぶつ……ゆうえんちは別にいい。もつと寝るう」  
あなたはため息をついて、布団に潜り込んだ娘に人形の玩具をちらつと見せます。

人形遊びでもしよう。だから機嫌を直してくれよ。  
娘の顔がふにやつと緩みました。あなたは出かけるのを止めて一日中人形遊びに付き合ってあげることに決めたのです。

次の日、目を覚ましたあなたは、娘が虫に集<sup>たか</sup>られているのを目にします。

急いで小虫を手で払うと娘に呼びかけます。

大丈夫か？ どうしたんだ。顔色が悪いぞ。

娘の顔は歪み、昨日着せた服の中からのぞく体には無数の紫色の斑点が広がっています。

「へへへ。大丈夫だよぱぱ。ちょっと体が痛いだけだよ」  
力なく笑う娘を見て、目じりが熱くなるのを感じました。急いで顔を手で隠すと、あなたはなんとも言えない嫌な匂いにするのに気づきます。まるで何かが腐っているような、すっぱい匂いが鼻腔を痛めつけるのです。

どうやら娘のほうから、その匂いは漂っているようでした。  
それでも構わずあなたは抱き寄せます。

痛いんだね。ぱぱがついてるよ。ぱぱがいるから。  
抱き寄せた娘の体はぶよぶよよしていて、今にもぼろりと腕が取れそうでした。その娘の体を優しく丁寧に、それでもきつく抱きしめると、あなたは唇を強く噛みます。

何が欲しい？ 何がしたかった？ ハル……どうして……。  
言葉が詰まって出てきません。交通事故で亡くした娘が、また遠い所へ行ってしまう。

娘は虚ろな目をどこかに向けて、ポツリと言います。  
「ふたつ……ぱぱにお願いがあるの。聞いてくれる？」

あなたはもちろん頷きます。何度も、何度も。

うん。お前のためなら何だってしてあげられる。言っ  
てごら  
ん。

娘は、一瞬痛さも忘れたようなあどけない表情で笑います。

「一つはね、ままとぱぱと一緒に居るところが見たい。二つ目は…  
…弟か、妹が欲しいな。お姉ちゃんになりたいの。そしたら、なん  
でも我慢できちゃう」

娘はそう言い終わると、目を閉じ、意識を腕に預けました。一斉  
に蛆虫達が娘の全身を覆い尽くします。異臭はさらに増して、部屋  
の明かりは急に薄暗くなります。布団は黒っぽい何かで汚れ、あな  
たの服は何かの液体でぬるぬるです。

腕の中で笑っていたはずの娘の顔を覗くと、眼球が収まるはずの  
場所は寂しく空いており、そこには何十、いや何百もの虫たちが蠢  
いていました。

……あなたは、その後どうするでしょうか。「倉庫娘」をもう一  
度求めるでしょうか？

あなたは、

## 玩具箱から世界を想像する男

じつじつと吹きすさぶ雪と風のせいで、窓ががたがた音を立てている。窓の外は真つ暗で雪の白色はくしやくが闇夜にアクセントをつけるようにちらついている。壁掛時計は深夜一時を指していた。

ここは函館にある少年刑務所の独房である。

四畳半の独房は立て付けが悪く、壁も薄い。部屋の中なのに吐く息は白く、暖房が満足いくほど利いていないので手足の先は感覚のないほど凍えきっている。がたがたという音がなっても仕方がないほど、古いものばかりだった。

独房に備えられているのは、剥き出しのトイレとブラウン管のテレビ、畳の上に積まれている一式の敷布団。そして机と筆記用具。

この独房に收容されている男は、久手といった。年は十七、グレイの上下服は受刑者として普通ではあるが、頭にぐるぐるに巻かれている包帯は見るものに奇怪な印象を与える。

包帯を巻いている理由は、この久手という男が收容される間際、頭から硫酸を被ったからであった。顔面の皮膚がケロイド状に溶けてしまい、見るものを不快にさせるため包帯で顔を覆い隠していたのだが、そのせいで表情が読み取れず、刑務所の看守は久手を持て余していた。

久手は、窓の外の世界を視認すると、今まで机に向かい貪るように書き続けていた原稿用紙へと視線を落とす。雪がちらついていると独りごちて鼻歌を歌う。

久手は父親殺しの罪で実刑判決を受けここに收容された。だが、精神に問題があると診断され、本州にある医療刑務所に收容される運びとなった。その本州への移送はこの次の日、一月十二日のことである。

この日 一月十一日 の面会時間に、久手の元を訪れた人がいた。

久手はその人との面会が大層楽しかったのか、楽しそうに鼻歌を歌い続ける。そして、急にハミングを止めると、原稿用紙を検分し始めた。

久手は原稿を検分しながら、着物を着た西洋人形のような顔を持つ少女を頭に思い描く。

そう、面会者である伊井筋いいすじ 桐真きりまという少女との会話を思い出していた。

面会室に、包帯男と着物を着た銀髪の少女が向かい合せになつて座っている。当然プラスチック板で二人の間は隔てられている。

少女の手には紐で綴じられた原稿用紙の束があった。

「あなたの書く小説は、なかなか興味深かったです」

人形のように整った顔を久手に向けて、面会者は笑いかける。

「それはよかったです」

久手も伊井筋に笑いかけた。包帯で顔面が覆われているため、笑い声で応答した、というべきか。久手の斜め後ろに立っている看守は、包帯男の機嫌がいいことを悟ると、安堵の表情を浮かべた。

「あなたの書いたこの『倉庫娘』という小説、最後の文章が完成されていませんけど、どうしたんでしょう。『あなたは、』の後にちゃんと書くつもりだったんですか？」

伊井筋は銀色の長い髪をかきあげて、久手に問いかけた。

「最後の文章は決まっているんです。ただ、書きたくないというか……完成させるのをためらっているんです。それよりも、あなたは……」

「伊井筋桐真と申します。桐真と呼んでください」

「桐真さん、あなたはどうして僕と話がしたいと思つたんでしょう」  
久手はかさついた皮膚が痒いのか、包帯の上から力強く頬を掻いた。

「僕はあなたを知らない」

銀髪の少女は事も無げに答える。

「ですが、私はあなたを知っている」

「フェアじゃないですね」

「ええ。あなたがここに居ることと同じです。でしよう?」

久手は口の両端を持ち上げてくつくつと笑う。そのおぼつかない笑いは、見るものをぞつとさせるものだった。

「僕はなぜだろう、殺した覚えもない父と、居た覚えのない姉のせいでここにいる。言われてみればそうですね。まったくフェアじゃない」

「記憶を失っているんですか?」

包帯から覗く両の瞳を濁らせて、久手は言葉を繰り返す。

「僕は記憶を失っているんですかね」

「あなたは何処の誰で、何者なんでしょう」

「何者なんでしょうかね」

久手の後ろに立っている大柄の看守は言う。

「こいつ、いつもこんな調子なんですよ。何を聞いても答えやしない。質問するだけ無駄ですよ」

伊井筋の後ろに立っている小柄な看守は、その発言をいなす。

「黙ってる」

大柄のほうの看守は、そう言われてはつの悪そうに舌打ちをした。そのやり取りを見て、楽しそうに久手は笑う。

「いいんです。僕が悪いんですよ。僕は過去をもたない。ないものはしゃべれない。捏造するしかないんです。誰か、いませんか?」

僕の過去を捏造できる人は

そういつて人をなじり小馬鹿にする態度は、大柄な看守の機嫌を損ねたみたいだ。

「人を殺しておいて……この」

伊井筋は、その言葉を遮るようにして久手と看守の間に割って入る。

「まあまあ。落ち着いてください」

少女は、大きくため息を吐くと久手を見つめ、言葉を吐き出した。「私は全て知っています。あなたが久手じゃないということも知っていますし、過去を持たないということも理解できています。だって、あなたはこの世界に居ていい存在じゃない、本当は遠藤圭という人物の偽物なんですから」

それを聞いた久手は、体を固め、伊井筋を注視した。伊井筋は、紅に染まった下唇を人差し指で弾く。

「気づきませんでしたか？ あなたは遠藤圭の形なりそこないです。人は誰も自分の分身をもっています。この意味、分かりますね」

久手はいきなり立ち上がり、震え出す。それを見た大柄な看守は、久手の両肩を掴んで椅子に無理やり押さえつける。

伊井筋は、不様に押さえつけられる久手を見ながら、手元に置いてある原稿用紙を彼に開いて見せた。

「見てください。『倉庫娘』という小説、あなたは確かに書きましたよね」

久手は開かれた原稿容姿のマスを目でなぞる。

「一文字も書かれちゃいません。白紙です。『倉庫娘』を書いたのはあなたじゃないです。遠藤圭が書いたものなんです」

少女が言ったとおり、原稿用紙は空白のマスが並べられている、まったくの白紙だった。

「じゃあ僕は……」

「誰でもない存在です。人間の形そこない。架空の罪を犯した架空の存在です。世の中には、そういう架空の領域というものがあるんです。そこから救うことができるのは、私だけです」

少女は立ち上がると、後ろに立っていた看守に目で合図を送る。

看守は頷いて、廊下に繋がる扉を開いた。

「ま、待ってくれ！！僕は、一体……」

少女は言葉をそつと置くように残した。

「心配はいりません。布団に入り、夢を見るのです。そうすれば救われます。いいですか、あなたは眠りにつくのです。そうすれば一

度と目覚めることはありません」

久手は伊井筋に縋るようにして質問する。

「どんな夢を見るのですか？」

その問いに少女は答えず、そのまま扉から姿を消す。

面会室に残されたのは大柄な男と久手だけだった。

久手は、はじめに、という文章を書き終えて、布団を敷いた。

掛け布団を捲り、体を布団と布団の間に差し込ませる。

どんな夢を見るのだろうか、と久手は想像を張り巡らせる。それはとても心地のいい妄想であった。とても魅力的で気が違ってしまうほどに。

まさか自分がなあ、と一人言を呟き目を瞑る。

「ごうごうと吹きすさぶ雪と風のせい<sup>は</sup>で、窓ががたがた音を立てている。窓の外は真っ暗で雪の白色<sup>はくしやく</sup>が闇夜にアクセントをつけるようにちらついている。壁掛時計は朝三時を指していた。

独房に備えられているのは、剥き出しのトイレとブラウン管のテレビ、畳の上に敷かれている一式の敷布団。そして机と筆記用具。

もはや独房に敷かれた一式の布団の中には、誰も居なかった。



## 壁伝いSOS1 こんこんと鳴る壁

曇り空と同化する建物。

僕が病棟を見上げたときに思った第一印象はそれだった。灰色で塗り固められた病棟を見上げて僕は白い息を吐く。

12月だというのに、生暖かい風が頬を撫でるように吹き抜けていく。

目の前に聳え建っているのは、精神病棟だった。聞くのも嫌な、セイシンビヨウの人が入院する病院だ。

これから病棟にいるであろう姉を訪ねに、この不気味な四角い箱の中に侵入しなければならぬ。ただ、姉の安否を確認するだけなのだけど、僕にとっては心苦しく、同時に怒りを覚える行為であった。

頭を振ってそんな怒りを頭の片隅に追いやり、足を前へ踏み出す。大丈夫、姉が好きな折り鶴もちゃんと千羽ぶん折って、肩掛け鞆に入れてある。僕はそれを手渡して、微笑みかけてやればいい。

なんて言えればいいのだろうか？

かける言葉は用意していなかった。だって、自分が傷つけられた分けじゃないし、あくまでも姉の気持ちは姉にしか分からないのだから。下手な言葉では、もしかしたら姉を傷付けてしまいかもかもしれない。あれこれと言葉をかけないように気をつけなくてはならない。僕は、病棟の入口に近づくにつれ、だんだんと不安感を募らせてゆく。

どういつて励ませばいいのだろうか。千羽鶴は姉の心を癒してくれるのだろうか。

入口の前に着いて思考を巡らせていると、鼻先にぴつという冷たさを感じた。

僕は顔を曇天の空に向ける。

雪だ。雪が降ってきた。

今年は雪が振るのがだいぶ遅れている。天気予報のキャスターは楽しそうにそう告げていたのを思い出した。

僕は視線を入口のガラス扉に向けて、唇を噛む。

受け止めることの出来ない事實は、忘れてしまえばいい。

そのために家族という絆があるんだ。

父や母でなくても、この弟である僕が。

姉を守るのは他の誰でもない僕だ。

僕は決意をして、精神病等の入口のガラス扉を開けた。

僕は中学を卒業して、受験を越えて高校生になった。そこまでラックの高い高校ではなかったけれど、親友である御名風みなかぜハルと一緒に高校に行くことが出来て若干嬉しかった。そのことを、まだ姉に伝えていなかった。父や母が僕の受験に迷惑がかかると、姉の居場所を受験を理由に教えてくれなかったから、姉が入院してから顔を合わすのは初めてのことなのだ。

両親は僕から姉を引きはがした。何度もそのことに不平不満を言った。けれども、両親は聞いてくれなかった。仕方がないことだと一辺倒の答えばかり。けれど、僕は諦めなかった。

高校の成績が上位十番以内であれば姉の居場所を教えろと発破をかけ、どうにかして姉の現状を知るよう努力したのだった。

見事入学早々の期末試験で十番以内を確保して姉の場所を教えてください。今に至るのだけど、少しだけ釈然としなかった部分があった。

どうして、両親は僕に家族である姉の現状を教えてくれなかったのだろうか？

普通なら、僕は姉の一人だけの弟なんだからと、教えるのが普通なんじゃないのか？

いろいろな疑問があったが、そんな疑問は浮かべるだけ無駄だと思っ生きてきた。

僕の世界では、現実にはシステムティックで合理的な世界なのだ。

人それぞれの能力のメーターに出来ることと出来ないことが割り振ってあって、能力値の高い 大に出た人が見える世界と、能力値の低い僕が見ている世界は完璧に違う。字の通り壁に隔てられた世界に生きているのだ。

そんな思いをずっと抱いて生きてきた。大に入学出来るような偏差値がないと、生きる価値がない。そう、本気で思っていたのだ。それを根底から否定する存在がいた。それは姉だった。

姉はいつも優しい声で、可愛い顔を隠すように切り揃えられている前髪を揺らして、言うのだ。

「元気だして、ほら私がいるから。けーちゃんはどんなつても私の一人だけの弟だよ?」

僕は受験の期間、幾度となく姉の優しい声に癒された。そうでなくとも、僕が子供だった時分から何度となく迷惑をかけたのだ。恩返しするとしたら、心の安定を崩してしまった今しかないだろう?

僕は、入口の受付の女性に姉の居場所を聞き、足早にそこに向かう。

どうやら姉は三階の右廊下の突き当たりの左側にある部屋にいます。みたいだ。

僕は走って姉の病室の扉を開けた。

病室は姉のベッドだけが置いてあった。それを見て、初めて個室だったことを知った。

目の前のベッドに横たわっている少女は、紛れも無く姉だった。

姉は、ふがふがと掛け布団を動かしている。

「三春姉ちゃん?」

姉は僕の姿を見て、もう一度動くこうとするが、そこまで動くだけの力がないのか、ぼこぼここと掛け布団を蹴っては、「ふー」と言うだけで、やがてゆっくりと動きが停止してしまった。

僕は駆け出し、姉の顔を見る。

姉の表情は青ざめて、力なく項垂れている。長い睫毛も同様に濡

れ伏せていた。

「大丈夫！？ 具合悪そうだよ」

何度か声を掛けるが、返事がない。僕は慌ててナースコールをかけるためのボタンを、ベッドの頭部分から探りだし、見つけて押す。そのとき、姉の頭頂部分 右の壁のほう からこんこんと音が鳴り、それからすこし経って壁越しから幼子の聞こえてきた。

お姉ちゃんを助けたい？

僕はその子供の声を聞いて一瞬耳を疑ったが、姉の顔色の悪さをなんとかするのが先決だと、枕元に放り投げられているボタンを手にとって、ナースコールをかけ続ける。

それでも声は止まない。

助ける方法があるよ。

何度押しても応答のないボタンを投げ出し、両手で耳を塞ぐ。

それでも声は止まらない。

すべて知っているんでしょ？

「誰だ？ どうして姉を苦しめるんだ。どうして僕を苦しめるんだ」  
今度は目を瞑る。けれど、瞼の裏に姉の苦しむ顔が浮かび上がる。

いい？ これから言うことを順番を守ってするんだよ？

この声は誰だ？

もう一度声がした。

いい？

1

僕は目を覚ました。

はっと意識を揺り起こす。どうやら随分長い間ぼーっとしていたみたいだ。

一旦背伸びをして欠伸をこなすと、もう一度ばかり学習机の上に据え置きされているパソコンのモニターを凝視する。

モニターは、ちりちりと点滅しながら、メモ帳を表示している。メモ帳には、たくさんの文字が敷き詰められていた。

さっきまで書いていた創作小説の文章を流し読みして、一通り確認をする。それが終わるとフォルダに保存して、パソコンの電源を落とした。

ぐるりと回転椅子を回して部屋を見渡してみる。視界の左側にあるカーテンの隙間に目を向けると、どうやら窓の外は雪景色みたいだ。雪が地面に向かって降りつけている。

目元がしばしばするのを感じたので、目元を手で揉んで首を鳴らす。小気味良い音が部屋に鳴り響いた。

かなり長い時間椅子に座っていたみたいだ。……それなのに、小説のほうは数行しか進まなかった。

構成はすでに出来上がっているのに、なかなか良い文章が思いつかない。スランプなんて経験したことないのだけれど、これがそうなんだろう。

（気分転換に、首を360度回してみようか）

僕は、そんなことできつこないのに、いちおう無理くり首を捻ってみる。結局、首と共に肩も動いてしまって、ちっとも面白くはなかった。

回転しないものは回転しないのだ。そういう風に作られてないんだから。

くだらないことをしたと一人ごちて、椅子から立ち上がる。そして何事も無かったかのように一階の居間へ下りようと、玄関に通じるドアに向かって歩き出す。

……ふいに、灰色の壁のほうが気になって、足を止めてしまう。

三春姉ちゃんみはるの部屋と弟である僕の部屋を仕切っている灰色の壁は、強固に聳え立っているように見えた。三春姉ちゃんを必死で守るように、がっちりと。

（三春姉ちゃんの痛みの程度を数値で表示することはできないだろうか）

僕はそんな馬鹿馬鹿しいことを真剣に考えてみた。180？ それとも200？ それとも……そもそも100がどれぐらいの痛みなのだろう。

唐突に視界を襲う眩暈。目元がしばしばしてくる。

もう一度、手で揉むために目元へ指先を向かわせると、湿った液体が目尻から流れているのを知った。

少し疲れたみたいだ。僕は、居間に降りるのを気持ちぶん……疲れが取れるまで遅らせることにして、部屋でもう少しグズることにした。

灰色の壁に隣接しているベッドに向かって歩き出すと、突然壁越しから乾いた音がする。

こんこん。

僕は返事してあげるべきか迷った。返事をすれば三春姉ちゃんが傷つかないのか分かっていた。けれど、それをすることに気乗りしなかった。

少し間を置いて、また壁から壁を叩く音がする。

こんこん。

ベッドに飛び込み枕で頭を覆い隠す。

音は、もう一度だけ鳴って、鳴りを潜めた。

こんこん……こん。

2

ちょうど一週間前のことだ。

いつものような家族四人の夕食が終わると、突然に父さんが僕に向かって「話がある」と言い出した。

僕は僅かばかり体を強ばらせて、思い当たることを懸命に頭の中から探し出そうとした。

そんな僕の隣で食器を片付けていた三春姉ちゃんは、一瞬手を止めて僕のことを覗くようにして見ると、顔を曇らせた。けれどそれ

は一瞬のことで、三春姉ちゃんはそそくさと僕の分の食器まで重ねて台所に持って行き、居間のドアを開けて子供部屋のある二階へ消えていった。

向かい側に座っている母さんは母さんで、わざとらしく咳払いをすると、いそいそと親父の食器と自分の食器を重ねて立ち上がり、台所のほうへ消えていく。

「……ねえ何のこと？　もしかして勉強のこと？　それなら三春姉ちゃんにから教えてもらっているから心配いらないよ」

僕の言葉になんら影響されず、父さんは母さんにお茶の催促をする。

多少ぎこちなく返事をする母さんに一瞥くると、一方的に話し始めた。

「実はな、お前に隠していることがあるんだ」

親父は僕を睨みつけながら、重そうに唇を開けて僕に向かって言った。

「大分昔にな、三春は、ある事件に巻き込まれて、心と体に大きな傷を負った」

「……何の冗談？」

「冗談をいうような父ではないことは長い付き合いで重々承知している。だけれども、あまりの唐突さに目を丸くしてしまった。いや、恐ろしくなったといったほうがいいかもしれない。」

母さんは二人分のお茶をテーブルの上に置いて、居間と外を分けるドアをちらちらと落ち着きなく見ている。三春姉ちゃんは部屋に行っただけ戻ってこない。

「……それ、僕だけ知らないこと？　家族の中で僕だけ？」

家族が僕にずっと隠していた……それが僕には恐ろしく感じたのだ。

父さんはじつと僕の目の奥を見据えて、喉仏を動かした。テーブルの上のお茶をひっ掴むと一気に飲み下して、三春姉ちゃんが巻き込まれたらしい事件の顛末を詳しく語り始めた。

「三春が二十歳の時……つまり今から一年前だな。ある冬の日、変質者に誘拐された。どうやら帰宅途中、一人でいたときに連れ去られたらしい」

やけに淡々と語っているのはわざとだろうか。父さんは目線を動かさず、まるで何かに縛られている猛獣に見える。

「……その二日後、三春が発見された。当時住んでいた 県の霊園で……裸のまま……茂みの中で放置されていた。気を失っているだけで一命は取り留めたものの……」

父さんの目は血走っている。母は首を出来損ないの玩具みたいに振り回して、ドアをちらちらと落ち着きなく見ている。

「三春は誘拐犯に性的暴行を受けたらしく、心を病んで、病室の窓から……」

僕は、眩暈を覚える。視界がブレて、今ここがどこなのか分からなかった。

「え。ちよつと待つて。三春姉ちゃんなら生きてるじゃない。死んでないでしょう。聞いたこともない」

もちろん僕の声は父さんには届かない。

「それから、そこには居づらくなって、ここに越してきた。本当は伏せたまま暮らしたかったんだ。だがな、三春がどうしてもお前にだけは秘密を打ち明けたっていうもんだから……」

そのとき、居間のドアが開かれて、三春姉ちゃんがおずおずと入ってきた。

「ごめんね、けーちゃん。けーちゃんだけには隠したくなくって。シヨックだったでしょう？」

三春姉ちゃんは困惑していた。当たり前だ。僕のほうが困惑している。だけど、その当たり前であろう反応が僕には恐ろしく感じられた。

「いや、ちよつと。ちよつと待つて……」

僕の声はやっぱり届くはずがなかった。父さんは、顔を顰めて胸ポケットからキャンビンマイルドの箱を取り出し、一本引き抜き、ラ



イターで煙草の先っぽに火をつける。

大きく煙を吸い込んで、どこか遠くを見たあと、おもむろに立ち上がり三春姉ちゃんの肩に手を乗せた。

「あとは……二人で話し合いなさい。きつと、圭も聞きたいことがある。いろいろあるだろうから」

三春姉ちゃんは、少し目を潤ませて、僕をきつく抱きしめた。

「……けーちゃん。けーちゃん。けーちゃん」

泣き始める三春姉ちゃんを……僕はなんとか抱きしめることができた。

3

僕は根気負けして、いつものように返事することにする。

こんこん。

このやり取りは、三春姉ちゃんが取り付けたものだった。あの日、三春姉ちゃんが泣いているのを僕が慰めたときに、三春姉ちゃんの身に起こった出来事を聞いたときに、泣き顔で、僕にそうするよう懇願したのだ。

どうやら三春姉ちゃんは、事件を聞いたことによって僕が自分を嫌うのではないかと心配になったらしい。僕はそんなことないよと言ったのに、なかなか信じてくれなかった。

それならばということ、三春姉ちゃんが心細い時に壁を叩いて合図する。それに僕が嫌いじゃないよという意味を込めて、合図を返すのだ。それがこのやり取りの持つ意味だった。

正直あの日以来三春姉ちゃんのこと、父さんのことも、母さんのことも良く分からなくなってしまっていた。

父さんに何度か説明を求めたけれども、「勉強しろ」の一点張りだったし、母さんにいたっては、その話を振ると何処かへ逃げていく。もちろん三春姉ちゃんには聞くことなんてできない。

大体……そんな事件なんてあったのだろうか。家族三人で何か企

んでいるのではないだろうか。そんな疑心暗鬼に満ちた気持ちで今までを過ごしてきた。

こんこん。

僕は、機械的に返事を返す。

こんこん。

……もしそのような事件が三春姉ちゃんの身に起こったとしたら、僕が今日会った三春姉ちゃんは一体誰なんだろう。全くの別人なのだろうか。そもそも三春姉ちゃんはどういうつもりで僕にこの話を打ち明けようと思ったのだろうか。傷ついてまでして僕に知らせる必要はあったのだろうか。

全てが謎だった。

考えれば考えるほど僕には全く関係の無い話のように思えた。

こんこん。

こんこん。

こんなことを何回も繰り返し考えて、とうとう居ても立ってもいられなくなった。

(その事件の記事を探そう。そうでなくても、)

こんこん。こんこん。

(三春姉ちゃんのアルバムを引っ張り出して、五年前と五年後の写真を見比べてみて、顔が似ているか似ていないか確認してみよう)

こんこん。こんこん。

僕は、取り合えずベッドから立ち上がり部屋のドアから廊下に出た。

結局父さんは、前聞いた似たようなことを繰り返して、僕を追い返した。アルバムの場所すら教えてくれなかった。母さんにも尋ねたが、それも逃げられてお終いだっただ。

とぼとぼ部屋に戻ると、気を取り直して、パソコンに電源を入れる。

ネットを使えば、事件の記事ぐらいは引っ張り出せるだろう。

父さんがあの時語っていた事件の詳細を思い出しながら、検索フ

オームに文字を打ち込んでいく。

県 霊園 二十歳 強姦……。

最後のキーワードを苦々しく思いながら打ち込み、検索をする。そして、丁度一番上に表示されたリンクをクリックしてみた。

だけど、リンクが切れていたみたいでお目当てのウェブページは開かなかった。

回転椅子を一回転して、目元を指で揉み解す。そうしていると、突然部屋のドアが音を立てる。

こんこん。

壁からじゃない、新たな「こんこん」を発見した。ドアから音がするのは初めてのことだった。僕はパソコンのモニターの電源を落とし、ドアまで行って、ノブを回そうとする。

その時に、ふと、本当に開けていいのだろうか。もし開けたらどうになるのではないだろうかという不安が頭を過る。

ねえ、けーちゃん。開けて。寂しいよう。

三春姉ちゃんのその一言が僕を心苦しくさせた。……どうしてもドアを開けなければならぬみたいだ。

灰色のドアの向こうの廊下には、パジャマ姿の三春姉ちゃんが、枕を抱きながら立っていた。後ろ髪をピンク色のヘアゴムでまとめ、右側に流している。いつもの三春姉ちゃんが寝るときの格好だ。胸が高鳴るのを感じる。それと同時に不安感がどんどん増していく。

「どうしたの？ 三春姉ちゃんってそんなに寂しがりやだったっけ？ 前は頼れるお姉ちゃんって感じだったのにな」

僕はドアノブから決して手を離さずに、三春姉ちゃんに何気ない返事をする。

三春姉ちゃんは、枕に顔を埋めながら、ほっぺたを膨らませた。

「……前と今は違うもん。それより、酷いよ」

三春姉ちゃんは右で一纏めにした後ろ髪のを適当につかみ指でいじる。

「え？ ごめん。僕何かしたっけ」

僕は喉を鳴らした。ごくり。ドアノブを握っている手はじんわりと汗を滲み出している。

「……こんこんって、すぐにへんじ」

僕は三春姉ちゃんの心が読めなくなっていた。いや、そもそも彼女の心をわずかでも読めたことがあっただろうか。彼女はいいなんなのだ。

「お姉ちゃん、けーちゃんに嫌われたら、生きていけないよう」

「……ははは。嫌いになんてなるはずないじゃない。三春姉ちゃんのこと大好きだよ。心から思っている」

「だって、お姉ちゃん傷物になっちゃったんだよ？ お嫁にいけない体に」

「そんなこと無いよ。嫌いになんかならない。ずっとそばにいる」

「じゃあ今すぐ抱きしめて……」

三春姉ちゃんが枕を落つことした。それと同時に彼女の手のあたりにキラリと光る何かが見えた。

ドアを思いつきり手前側に引く張る。けたたましい音をたてて、灰色のドアは閉まった。

何かが見えたはずだ。キラリと光る……アレはなんだろう。僕をどうにかするつもりだったのだろうか。

目を剥きながら灰色のドアを凝視していると、ドア越しから彼女のすすり泣きが聞こえる。

「……どうして？ そばにいるって言ったじゃんか。寂しいよう。寂しいよう。」

僕はなんとか言い訳しようとした。だけれども思いつく言葉は一つもなかったし、あった所で出てこないということを確認していた。だって、口が乾きすぎていたから。

「けーちゃんは私のおとうとなんでしょ？」

しばらく同じ言葉を繰り返していたが、やがて静かになり……ま

た不吉な音が鳴る。

こんこん。こんこん。

僕は返事することができなかった。そして、そのこんこんが消えてしまつまでドアノブから手を離す訳にはいかなかった。

……僕は、三春姉ちゃんのおとうとなんだろっ？

×××

新聞 12月29日

父親を絞殺、凶器の縄で首を吊つて少年K意識不明の重体

12月28日午後12時半ごろ、裂目町二条四丁目<sup>なげめ</sup>の住宅の一室で「夫が殺された。息子が殺した」と一〇番通報があつた。

警捜一課によると、被害者はこの住宅の家主である遠藤隆（48）であると判明。検死の結果直接的な死因は首を締められたことによる窒息死とのこと。

また、同時刻、同住宅の二階の一室で首を吊っていた被害者の子供で長男の少年K（17）を保護。首を吊つてから発見されるまでの時間が短かつたため一命は取り留めたが、意識不明の重体で病院に搬送された。

警察は、通報者で被害者の妻である遠藤美鈴（46）の証言や、少年Kが首を吊るのに使用した縄に被害者のと思しき唾液が付着していたことから、被害者を絞殺した凶器と同一のものであると断定、少年を最重要容疑者として捜査を進めている。

また事件当日、現場の近くに不審者が居なかつたか聞き込みを行つたところ、大柄な男を見たという目撃情報入手。この大柄な男の捜査も並行して勧める模様だ。

事件の真相は掴めず

父親を絞殺した疑いがかけられ、自らも首を吊った少年Kの事件（以下、裂目町少年K事件）の捜査が早くも暗礁に乗り出している  
と警察は記者会見で発表した。

その理由は、発見者であり容疑者の妻の遠藤美鈴さんが錯乱しており正確な証言が得られないことが一つ、また容疑者である少年Kの意識が戻らないためだ。

この事件の記者会見で警察は「少年Kの意識が戻り次第逮捕勾留し、事件の全容解明に努める」と発言した。この発言（逮捕勾留）に少年法の強化を呼びかけている弁護団は、発言撤回を要求、証拠物件の不備と主張。会見現場は終始大荒れの様相で締めくくられた。

一方、不審に思われた大柄な男の情報も十分に集まらないため、警察は少年Kを第一の容疑者とみて捜査を進める方針だ。

## ハルの冒険1 少年はちょっとやさつとのことじゃ顔かない

1

あなたは、けいちゃんの親友でしょう？

12月の月が綺麗な夜一時。ひとけのない山奥の忘れ去られた神社。

山奥では本当にいろんな音がする。古ぼけた神社であつては言うまでもない。

枯れ葉が石段に擦れる音。

「はあ、はあ」

からつ風の吹き抜ける音。

「はあ、はあ……」

両脇に生えつらなるカエデの木々の騒めく音。

「はあ……」

そして、ただひたすらに階段を上り続ける変わり者の息遣い。

厚手の黒いパーカーに、カーキ色の七分ズボンを履いている小柄な少年。パーカーのフードを目深にかぶっていて顔は一見して見えない。それが、変わり者の風貌だ。

変わり者である所以は、普段なら誰もこの神社に参拝なんてしないからだ。

参拝どころか散歩する人の姿もこの神社では年中見ることが出来ない。

そんな場所で、しかも夜中に、この少年は階段を黙々と駆け上がっている。これが変わり者ではなくてなんであるうか。

変わり者ことミナカゼ ハルは、誰もここに訪れないからこそこの場所を選んだ。他人に見られては困る理由があつたからだ。

鳥居から本殿に向けて真っ直ぐ上に伸びている石造りの階段を、少年はただ黙々と上り続けている。

ときおり枯れ葉が鳴らす音を聞いては、それを合図に立ち止まり、誰か来たかと周りを見渡して、息を整えまた上る。

階段を上りきり参道を駆け抜け、神様の鎮座する本殿の前にたどり着き、賽銭箱の前で立ち止まる。その賽銭箱の上からだらりと垂れている綱を力いっぱい揺らし、鈴をがらんと鳴らす。

鈍い音を確認してから二拝二拍手をきちんとこなし、最後の二拝でしばらく手を合わせる。

ただの普通の参拝風景である。だが、やはり普通ではない。

その理由は、この神社が「首なし神社」として有名な神社だからだ。……要するに、いわくつきの神社で、山奥というのもあって、誰もここに来たがらない、忘れられた場所ということだ。

それでも少年は、この神社を選んだ。

本殿の明かりは、ハルを仄かに照らしている。その明かりはとても弱々しく頼りないものでもあった。こんな寂れた神社で願をかけて、はたして叶うのか疑わしいほどに。

それでもハルは願うことをやめなかった。

「お願い……します」

そう口に出すと、本殿から体を翻し鳥居に向けて歩き出す。少し寒気を感じてパーカーのポケットに手をつ突っ込んだ。ふと気づいて、賽銭箱にしゃがみこむと、箱の周りに敷き詰められた小石を選び、拾いあげてポケットに滑り込ませる。

目的を終えて、立ち上がり一つため息をつく。

本当ならひしひしと沸き上がる達成感に小躍りしたい気持ちであるはずだ。だが、終わったあとに感じた気持ちはそれと別種の虚無感だったのだ。そう、胸が空っぽになったような。

ハルは夜空を見上げて、また、ため息をついた。上の空である。

空に浮かぶ三日月はとももおおきな弓なりを形づくっていて、黄色に光り輝いている。

この神社の境内には本殿から漏れる明かりしかなく、ほの暗い。微かにぼうつと灯る本殿の明かりと、鋭く輝く三日月の月明かりが



さらに不気味な神社を演出していた。

ハルは気持ちを切り替えたように右手をきつく握ると、足を前に踏み出した。

とたん、体が仰向けにひっくり返り、境内の地平線に吸い込まれるように消えていく。

「なあああああっ!!」

なんとか体勢を立て直そうとするが、ハルの足元には足場がどこにもなかった。そこでやっとハルは階段を踏み外したことを悟った。「おちるうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっ!!」

そのとき、誰かに後ろから引く張られる。

引く張られたハルは、何者かに受け止められたのだ。

ハルにとって、一瞬何が起こったのかわからない出来事だった。それも当然のことで、この少年にとっては、この神社は誰もいないはずの空間であったし、それを何度も確認したはずだと思っていたのだから。

いつのまにか体を後ろから支えられていたハルは、ようやく大柄な誰かに受け止められてることを知った。

「あ、あれ？ 誰か……」

「……大丈夫か？」

声のトーンから、ハルは女の人だろうと推測した。

「お姉さん？」

まず頭に思い浮かんだことは、このまま下におっこちなくてよかったな、という間の抜けた感想だったろう。感謝の気持ちとか、どうしてこの場所にいるのかとか、どうして落ちそうになったのか……いろいろいると言っべきことを思い浮かべただろうが、少年の口から飛び出た言葉は、場にそぐわない戯言だった。

「っ、月が綺麗だったから……なんです」

言ってしまった後で、ハルは脱げてしまったパーカーフードをかぶり直し、両手で頭を抱え、やってしまったと後悔する。

とっっても恥ずかしい。冗談じゃなく本当に顔から火が出そう。そ

う思ったのか、ハルは、じたばたともんどりを打とうとする。が、脇腹をしっかりと固定されていたので、体は微塵も動かない。ハルはようやくと、ワntenポ遅れて、体がしっかりと固定されていることに気づく。

慌てて立ち上がるうとするハルの体が、勝手に持ち上がる。後ろにいる女の人がハルの体を持ち上げたのだ。そのまま体は起立する。

「上ばかり見ていては危ない」

女はそういってハルのズボンパンパンと払った。ハルは取り敢えず体だけでも感謝の意を示そうと、お辞儀するために振り向こうとする。が、両の腕はがっちりつかまれて、振り向くことは叶わなかった。

後ろの女は、

「鳥居を抜けるまで誰にも会ってはいけない。そうだろう？」

といて、つかんだ腕を離れた。そしてハルのフードのてっぺんをポンポンと叩き、背中をつんと押す。

「どうやら、振り向かずそのまま行け、という合図らしい。」

「あ、ありがとうございます」

ハルは、フードの端をつかみ、深くかぶり直した。

2

参道から鳥居まで続く階段を下るあいだは、とても不思議なひとときだった。

確かにハルの後ろに女の人は居る。けれど、彼女のあまりにかすかな足音と、会話の一つもしようとしない態度に、本当に彼女は存在するのか？ 人でない何かなのではないだろうかと思っても仕方ない。

顔も見えていない存在に対する疑惑の念をすっきり晴らすことが出来なかったのだろう、ハルは何度も首を動かしていた。

その疑惑を取り除くため階段を下りるあいだ、ハルは何度も彼女に話しかけようとした。けれども、そうしようとする度に自分が口下手であると思いついて、諦めたように首を正面に戻した。

ハルの不思議な挙動は、首を動かす他に、もう一つあった。

それは、この人物に対して怪しく思っているのにも関わらず気持ち穏やかに落ち着いたのか、柔和な笑みを浮かべたのだ。

確かに柔らかい何かに包まれているような、ぬるいお湯に使っているような居心地で、強い圧迫感も感じない。そういつた、攻撃的な雰囲気は彼女は微塵も醸し出していなかった。

赤色の鳥居を抜けて、ようやくハルは後ろを振り返る。

今までハルの背中に立っていたのは、身長が一メートル八十センチほどある大柄な女だった。

顔立ち是非常に整っていて、鼻梁は筋通り、彫り深い目元。外にハネる赤みがかつた短い黒髪が、凛々しさをより一層際立てている。服装はチーターのロゴで有名なスポーツメーカーの赤色ジャージであつたが、その運動服特有のだらしないイメージはなく、ま逆の清潔なイメージを見る者に与えさせる。きつと筋肉が人よりもついているからだろう。どちらかというところ、アスリートというよりも、軍人さんみたいだとハルは思う。

「その、軍人みたいでカッコイイです」

そう声を出してしまつてから、ハルは失礼だっただろうか物案じ、あからさまに目を逸らせた。そのようなハルの想像に反し、彼女は頭をぱりぱり掻き、少し照れたようにもじもじと体をくねらす。そして握手を求める手を伸ばす。

「ありがとう。私はクリフ」

ハルはクリフの伸ばした手をどうしようか、一瞬思案してから、握ることにする。その手は初冬の夜には似合わず、とても暖かい。

「あつたかいです」

「……お前の名は？」

「……ハル。御名風みなかぜ ハルです」

クリフはそのまま手を引つ張つて、道路をまたぎ、鳥居の向かい側にある公園のベンチまでハルを連れていく。

公園には、キリンを模した滑り台と、黄緑色一色ののぼり棒（ところどころペンキがはげ落ちて錆び色を見せていた）、あとは二畳ほどもない砂場があった。どれもが今では誰も遊ばない、誰も喜ばない遊具の類だったが、この公園を囲う茶色い柵の下面に広がる街明かりや、海面が反射する夜明け光は絶景である。

クリフが何も言わず滑り台の向かいにあるベンチに腰を下ろしたのを見て、連れられたハルも同様にクリフの隣に腰を掛ける。

彼女は物々しく口を開いた。

「……何を願っていたんだ？」

「え？」

「お百度参り」

クリフはそう言つて、顎に手をあて頭をかしげた。どうやら古い記憶を呼び起こしているみたいだ。

「……違うのか？」

ハルはその言葉を聞いて驚き声をあげる。

確かにハルはお百度参りをしていた。それも、今日で百日目の大団円で目的を終えたところだった。

でもそのことを他の誰にも話した覚えはハルにはなかった。だって、誰かに話したならば願いは叶わないと有名であるし……そんなことを話せる人もいないのだから。

参拝中は誰にも会つてはならないという制約も有名だ。だからわざわざ郊外からかなり外れた、山奥の寂れた神社までこうしてハルは参拝していたのだ。

「ど、どうしてそのことを知っていますか!？」

慌てていたせいで、無意識裡に大きな声を出してしまう。

クリフは何でもないことのようにさらりと答えた。

「私は毎日ここを走っているんだ。だからハルを見たのはこれで初めてじゃない」

そしてにつこりと笑う。

「実は毎日お前を見ていた」

「た、助けてくれて、ありがとうございました」

正直ちよつと引くな、変態さんだな、とハルは思ったのか、腰を引き、距離を取るうと、ハルは立ち上がる。

そうやって逃げようとするハルの腕を、クリフはがっちりつかむ。

「……待て」

「なにか？」

振り向くと、クリフがポケットに片手をつ突っ込み何かを取り出す動作が見えて、ハルは怯える。身の危険を感じたハルは体を震わせ、クリフを見下ろす。一方、クリフはお構いなしにポケットから手を抜こうとする。

「ま、待ってくれ。渡そうと思ったんだ」

「何をだよっ！！ あ、すいません、け、結構ですので……大丈夫です。まだ見ていませんから、関係ないですからオオサメクダサイ」  
逃げようと腕を引っ張るが、逃がすまいとする大女の怪力には叶うはずも無く、それどころか掴む力がだんだん増しているせいで、掴まれた腕がミシミシと音を立てる。

かなり力強く握られたので、とうとう耐えられず「いたっ」と声が出てしまった。

その声を聞いてクリフはぱつと手を離す。

突然腕を離されたので、それまで逃げようと足に力を入れていたハルはベンチとは反対方向の砂場に吹っ飛んだ。

「そんな物騒なものじゃない。ただ、この、缶コーヒーを」

弁解しよう思ったのか、クリフはあたふたと身振り手振りで腕を動そうとする。だが、ポケットにつっこんだ腕がなかなか抜けず、それでも無理やりポケットから手を抜いたばかりに缶コーヒーが勢い良く発射されてしまった。その缶コーヒーは砂場に倒れた砂まみれのハル目掛けて一直線に飛んでいく。そして、ハルの頭をすこ

ーんと鳴らした。

「は、は……すまん」

ハルはゆっくりと頭を抑える。脱げたパーカーフードをかぶり直す。足元にはさつきクリフが言ったとおりの、なんの変哲のない市販のコーヒーの缶が転がっていた。……どうやらマンデリンのココクが美味しさの決め手らしい。

「……」

その缶コーヒーを拾い上げて、クリフのほうにゆっくりと時間をかけて振り向く。

「あ、あの……その……お疲れ様」

目の前のベンチ座っているクリフは気まずそうに苦笑いを浮かべている。

ハルはとりあえずといった調子で、こういった。

「ナイスショット」

3

ハルは手の中で缶コーヒーの缶を弄び、ベンチの隣脇にそつと置く。

「……とつてもぬるい……ですね」

ベンチに二人並びながら座っている。階段を下りるときに感じた不思議な感覚がふんわりと蘇ってくるようだ。ぬるいお湯に浸かっているような、柔らかな布に包まれているような、とにかく不思議な感覚だ。

「神社にいるあいだ、クリフさんがぼくに話しかけなかったのは、お百度参りだと確信していたからですか」

クリフはハルが置いた缶をいったんみてから、ハルの顔をむいた。「合っている。でも、今日が何日目なのかは知らない」

「なぜ、お百度参りだって分かったんですか」

ハルがそう言うと、クリフは右のほうを指さす。指を指したむこ

うには、神社の鳥居があった。

「鳥居の根元に積んである石。石で回数を数えるのはいいが、ちゃんと最後まで片付けなきゃだめだ。気づいた日から私がずっと片していた」

「す………すみません」

そういつてハルは肩をすくませる。

「でも………気づいていたのなら、話しかけるタイミングはずっとあったじゃないんですか。ぼくが鳥居を出て石を置いているときとか………」

「………最後まで待つ必要があった。今日はこうして長話をするつもりだったから、石の個数が九十九個になるまで待ったんだ」

「な、なるほど………」

数秒の沈黙。

「あれ？ どうしてクリフさんは階段の上にはいたんですか？」

「もう必要ないであろう小石を戻すために、賽銭箱のある階段の上に登る必要があった。そのとき空を見上げながら歩いているハルを見つけた」

「そ………それもすみませんでした」

申し訳なく思ったのか、ハルはもつと体を縮ませた。クリフはハルの考えていることに気づいたのだらう、階段の上でやったように頭に手をのせて、ぼんっと叩く。

「気にするな」

「………」

また来る数分の沈黙。

ハルは身を縮めたまま、恐る恐るクリフをちらと覗き見た。クリフはとても幸せそうに微笑んでいた。

「何が目的なんですか？」

そうだ。もしかしたら何か要求してくるかもしれない思ったのか、クリフの真意が分からず、ハルはどうしても怯えてしまう。

「あの………長話って、なんですか？」

「まず先に、後を付けるような真似をしてしまい、申し訳なく思ってる。許して欲しい」

クリフは頭を深々と下げる。それを見て、ハルはきよとんとした。「別にいいですよ。ぼくも久しぶりに人と何気ない話が出来て嬉しかったですし」

ハルにとつては本心だった。こうやって、アレコレものを考えて言葉を選ばなくて済みそうな人はハルの周りには一人もいなかった。ハルの周りに居る人は総じて気を使わなくてはならない対象だった。そうしないと

「ハル。また何か深く考えているのか？」

「えっ？」

「顔に出てる。私はそういう表情は嫌いだ」

「す、すいません」

「自然に口から出た言葉を話せばいい。想像したり、考えたりするのはそのときがくるまで他のやつに任せればいいんだ」

「トンチンカンですね」

けれども、その二人の雰囲気は妙に優しく甘い様子で、ハルは笑いを漏らす。クリフもそれをみて笑った。

しばらく二人して笑いあう。クリフは満足げな表情で、

「そつだ。それでいい」

と言った。

今の言葉を上手く理解することは出来なかったけれど、今の言葉には悪意が隠こもっていないと自分は感じている。

ハルはいつのまにか、クリフがどのような目的で自分に近づいてきたのかはもはや気にならなくなっていた。多分……心細かったのかもかもしれない。

気づけばまた、自然と口から言葉が溢れていた。

「クリフさんって、優しいんですね」

「自分のことを優しいと思ったことはない。でも、優しくなりたいとは思っている」



クリフはジャージのフアスナーを首まで持ち上げて、襟首が作り出す隙間に少し顔を隠した。

その仕草は、心をさらに解すこととなる。

「少し、一人ごと言っていていいか？」

「どうぞ。ぼくも一人ごと、よくしますし」

「私は……」

クリフが次の句を続けるまで、数分ぐらいハルは待っていた。

……外は相変わらず肌寒く、風もここ数日間ずいぶん強めだった。こういう日に外でじつと何かを待つのは、苦ではなかった。むしろ好きなくらいだ。冷たくなる手のひらや、思ったように動かない指を見る。時が止まっている感覚が、好きなのもかもしれない。

「私には、ハルぐらいの息子がいた」

「ぼくぐらいの……ですか」

ハルは手のひらを翻し翻し表裏をみて、厚手のパーカーのポケットに手を突っ込む。

「お前に似てる息子だ」

弟と言われ、少し複雑な気持ちになってしまう。そんなハルの気持ちに、どこか遠くの一点を眺めているクリフは気づかない。

「もう会うことはできないし、そのことは十分承知だが、やっぱり思いつく。あれをしてやれば良かった……こうしなければよかったなんてことを」

「だからぼくを元気づけようとしてくれるんですね」

「嫌だったか？」

ハルは首を横に振った。

「できれば……その息子さんの話を聞かせてください」  
「……」

クリフは答える代わりに、ベンチから立ち上がった。そしてハルのほうに振り返る。

「いや、その話をするにはまだ早い。私の心はそれほど丈夫ではないんだ。だから、必要以上にハルに触れてしまった、ということを

納得してくれるだけでいい。納得してくれるか？」

「もちろん」

「ありがとう。……当然、それだけを伝えるために後を付けていた訳じゃない。ハルの願いを叶えてやる事が出来るんだ」

その言葉にハルは総毛だったように放心した。

「ぼくの、願いを、叶えてやる、ことが、出来る」

いろいろな思いのせいで頭が真っ白になり、体は強ばる。ハルは一つずつ、たった今聞えて来た言葉の文章をぶつ切りにして単語に分解し、検分する。ハルの心に警戒心が芽生えてしまった。

「ふふふ。それ、どういう意味ですか？」

クリフは今一度顎に手をあて、真剣な目付きでハルを凝視した。

その一連の動作は考えあぐねている様子にも見えるし、何かの暗示をかけているようでもあった。

クリフは何も言わず、ただ手のひらをハルの頭の上にかざす。

「何も想像するな。頭を空っぽにしろ」

そう言ったとして、一度警戒した心はすぐには解きほぐされない。そんな突拍子もないことを言い出した驚きはもちろんあったのだろうが、なによりあれほど悩み続けていた心の傷を土足で踏みにじられた行為は許し難いのではないか。

「何も想像するな。頭を空っぽにしろ」

「ぼくは……」

「何も想像するな。頭を空っぽにしろ！」

クリフの大声でぼうつとしていたハルはうつらうつらしていた目を覚ます。

「クリフさん？」

「そうだ。私だ」

「クリフさんの大声、初めて聞きました」

「そうだ。初めてでした」

「とっても怖かった」

クリフはなにか言おうと思案し、もぐもぐと口を動かした。だが、

それは言葉となつて表れないまま、からっ風に消えて流れていった。そんなクリフの虚しく溶けていった言葉の代わりに、ハルは、放心したまま、何度となく考えていたことをそっくりそのまま口にした。

「ねえ、クリフさん」

「なんだ？」

「ぼくだつて、願いが叶うなら、叶えてもらいたいです」

「必ず叶える」

「でもそんな簡単じゃないです。何かを叶えるなら相当の代価を払わなければならぬ。これって自然の摂理でしょう？」

「ああ」

「けれど、ぼくには何も引き渡すものなんて残っちゃいないんです。利用する頭もなければ、利用される価値すらない。どん臭いし、言われたことしかこなせない。周りにとつてのぼくは存在しないも同然でした」

「その通りかもしれない」

「おまけに自分を騙さないと人を信じれません」

次から次へとハルの口から言葉が流れ落ちてしまふ。初めて会った人にこんなこと言うべきではないのに、自分の思いを否定しようとはしないクリフの返答に、ハルは苛立ち、言葉が勝手に口からこぼれ落ちてしまうのだ。濁りきってしまった言葉の数々を止めることは、ハルにはどうしても出来なかつたはずだ。抗いたい一心でなりふり構わず行動してきたその全てを否定されることは、ハルにとつては耐え切れないことだったのだ。

「……そんなぼくにいつしゅんでも夢を見させるような言葉はあつちやいけません。だつて、それつとつても残酷だと思いませんか」

「……」

「思いませんか？」

「……ハル、お前の言うことは概ね正しい。けれど、対価を決める

のはハルじゃない。ものの価値は単一ではない」

「なにデタラメを……」

「聞け。……確かにハルは利用する心もなければ利用される価値もないだろう。だがそんな他人に決められた価値は、ハルの価値なんかじゃ決してない」

「ぼくの価値……?」

「ごちゃまぜな考えに浸るな。何が一番大切かだけを考える」

ハルには、目の前に立っている大女の言っていることが正しいことなのか判断できなかった「でも」や「そんなこと言っただって」とうわ言を繰り返す。

「私には、いや、私たちにはハルの大切な願いを現実に変える力がある」

クリフはそういうと、ハルに片手を差し出した。

「思いを胸に秘めることは悪いことじゃない。問題は思いが腐ってしまうことに気がつかないことだ」

「……なんだか、食べ物みたい」

ハルは両の手を擦り合わせた。ごしごしと懸命に擦る姿をみて、それでもクリフは手を差し出し続ける。

「いいか、大事なことは算段なしに何かをしようとする気持ちだ。お百度参りするぐらいの気持ちを持っているハルだったらすでに持っているはずだ。次に、誰かに助けを求めることだ。夢を叶える近道は、助言の中にしか存在しない」

「クリフさんは、ぼくの悩みを知っていて、それを解決する術を知っている。なんの価値もないぼくを、クリフさんは必要としている……ということですか?」

「いや、悩みは知らない。だから知りたいんだ。その食べ物に貼られたラベルを私に教えて欲しいんだ。私を少しでも、信用してくれるなら……いや、この際信用しなくてもいい。もし、一人きりでアレコレ抱え込むのに疲れていたのなら、どうかこの手をとって欲しい」

彼女は、決して手を引つ込めようとはしなかった。でも、ハルの手を無理やり引つ張ろうともしなかった。

クリフは、なかなか手をつかもうとしないハルを見て、ため息をついて言った。

「……言いたくはなかったが……ハルは」

とても言いにくそうに言葉をつむぎだそうとする。

言いにくいに決まっている。……なぜなら、彼女はこの言葉を回避するために、こんなに回りくどいことをしたのだから。直感ではあるけれども。

そして、ハルのせいで彼女が傷ついてしまう……。

ハルはお互いのために、言葉を引き継ぐことにした。

「はい。ぼくは死んでいます」

「……知っていたのか？」

「はい。ぼくは浮遊霊つてやつなんですよね？」

4

公園の電燈の光に負けないぐらいの光を纏っている三日月を、ハルはただ見上げる。

ハルは自分が死んでから今までの過ぎ去った時間を懸命に思い返していた。言わなければならぬことが沢山あり、それを順序建てて説明しようとはしているのだけど、思ったよりもそれは困難な作業らしく、ハルはため息を一つついた。

そんな苦心しているハルを見て、クリフは出来るだけ優しく声をかけてやる。

「思ったことから話してくればいい。それで、私は十分に理解出来る」

「そ、そうですね」

「……それに、敬語は好かない。くだけた言葉でいい」

「そ、そんなこと出来るわけない……です」

「ほら」

クリフはハルの頭をなでつける。ハルは体が火照るのを感じたのか、頭を俯かせる。

こうまで優しくされては、彼女に従うしかあるまい。

「……知りませんよ？」

「ほら、ほら」

クリフの顔を見ると、若干楽しんでいるような様子だったので、ハルは両肩をすくませる。

「いじわる」

笑いをこらえきれなくなったのか、クリフはとうとう吹き出した。

「わ、笑うことないじゃんかー!!」

「ぶっ……」

吹き出したクリフをみて、ハルは何かから吹っ切れたのか、思ったことを片っ端から言ってみようと考えた。そう、出来れば彼女を困らせるようなモノであればあるほどいいだろうか。なんて、ハルはニヤニヤと笑う。

そんな謀略をハルが立てていることをクリフは露ほども知らず、おお笑している。

「クリフさ……いや、クリフ!」

「はい、なんでしょう」

いかついガタイの大女がいきなり敬語を使い始めたので、ハルは少し面食らった。けれど負けじと応戦に努める。

「あのね、ぼくのこと息子に似てるって言ったでしょ？」

「ああ。言ったな」

「あれ、イクない」

「ん？ 何が？」

「わたし、女の子で、ごじいますことよ」

ハルは立ち上がってくるりと一回転。クリフは目をぱちくりしている。

スカートを履いているわけではないのできらびやかに翻るものが

あるわけもなく、パーカーのフードと首元の紐が宙に浮くだけの光景は、ただひたすらに滑稽だったが、ハルはそんなことお構いなしに得意げに鼻から息を漏らす。どう？ 女の子っぽいでしょう？  
と言わんばかりに。

「……それは本当か？」

目をしばたかせるクリフを見て、ハルは懸命に抗議する。「レデイになにいつてんだー」とか、そういった類の戯言だ。それでもポカンと口を開けているクリフを見て、業を煮やしたのか、ハルはとうとう、

「んじゃあ、触ってみる？」といった。

そういつてパーカーの中をちらりと胸を見せようとする。だが、凹凸のない白地のUネックのTシャツが覗くだけだ。クリフはまるで何を見せたいのか理解できないふうにぼんやりとその仕草を眺めるだけだった。

「……おっばい」

「あっ……ああ。そうだな。とびっきりの女だ。女に違いない。はは」

「ごめんなさいは？」

「悪かった。よく見たらそう見えないこともないこともなくないな」

「……どっち？」

「悪かったよ」

それでよし、と人差し指を立て、ハルは含み笑いを漏らす。なんだか胸が軽くなったみたいだと感じているのだろう。そのおかげで、胸につつかえていた言葉がすらすらと口から流れ出す。

「どうしてぼくのこと見えるの？ クリフってなにもの？」

「何者に見える？」

「質問を質問でかえさないでちょうだいよ」

クリフはおてあげといった調子で両肩をすくめてみせ、質問に答えた。

「私は確かに人とは違う。よってハルの姿がばっちし目に映ってい

る」

「……といますと？」

「謎は多いほうがいいだろう？」

「それ、卑怯じゃなか。せつかくぼくが死んでからのことを徒然と語っていくつもりだったのに」

「追い追い分かる。私が今この場で実は霊能力者なんだと言っても、信じれないだろう？」

「信じるよ。もう、ほんつとーにーから十まで信じるってば。だいたい、そんなこといったらぼくはフユウレイですよーってことだつて、信じれないはずじゃん」

クリフはぼりぼりと頭を掻き、

「ようく見てろ」

と言った。

クリフは立ち上がると、目を瞑り、何事かを念じ唱える。

残念ながらそれは何語なのか見当もつかなかった。

クリフは三日月を見上げ、右手を上げる。指は、銀貨の一枚でも掴み取るような手つきで窄み、ハルの頭上を掠め取るように艶かく動く。とたん、クリフの頭から、真っ白なものが垂直に伸び上がり、ちゆうとで後方に向かい捻じ曲がる、角と呼ぶべきものが生え始めた。それを合図に、ジャージの背中部分が盛り上がり、何かが突き破り始める。その何かは、黒々とした羽であった。おもう存分に生えきつた羽はいっかいはさりと呼吸をするように動く。

ハルは、その角と羽をみて、驚き声を上げる。

「ひよえ……」

と口からかつてに感嘆の声が飛び出してしまふほどに驚いた様子だった。

ただの角と羽が生えてきただけなのだけど、その漫画に登場するキヤラクターの容姿は、威圧的で、どこかしら悲壮感を帯びていた。それ以上に衝撃的だったのは、クリフの黒目を切り込むようにして横に細く伸びた瞳孔であった。明らかに人の目ではない。



それはまさしく悪魔だ。山羊の角と瞳を持ち、コウモリの翼を生やすバフォメット、もしくはサタナキア。墮天使ルシファーに仕える悪魔そのものである。

「どこか、悲しそう」

それを聞いて、クリフは目を真ん丸にする。

「怖くないのか？」

ハルは首を横にふる。

「もし、この姿のまま、クリフが登場したならばくは怖がっていたと思う」

「……」

「けど、ぼくにハイリヨして隠してたんでしょ？」

「いや、」

「違うの？」

「それもあるが……私はこの姿が大嫌いなんだ」

「ふうん」

なるほど、と頷いて、ハルはクリフに顔を向けた。

「ぼくはカツコイイと思うけどな」

「あ、ありがとう」

「それで、ぼくを地獄まで連れていくためにきたの？」

クリフは答えない。

「だって、ぼくまだ天使に会ってないよ？」

5

ハルは、ずっと一人ぼっちでこの世をさ迷い続けていた。ハルが死んだ翌日、自分の身に起きた事態を理解してから、あらかたのことを試した。この姿で出来ることと、出来ないことをだ。けれどそれも三日で終わった。それは驚くほど簡単な分別行為だったからだ。ひとつ、物を掴むことが出来る。けれど、食べることや飲むことは出来ない。

ふたつ、痛みなどの五感はある。けれど、空を飛んだり、壁をすり抜けたり出来ない。

みつつ、テレビを見ることが出来る。ゲームもちろんだ。本を読んで調べものだって出来る。

……けれど、人と接触することはできない。

いや、人にこつちから触れることは出来る。けれど、人から触れられたり、会話することが出来ない。

すべて霊からの一方通行の行為であった。

一度、接触しようとして人のパソコンを弄ったり、校庭に転がっているボールを蹴ってみたり、ブランコを漕いてみたり、禿げたおじさんの頭をペシペシ叩いたりした。けれど、それを見た人やされた人の反応は、どれも無かった。

皆一様に無反応。最初のうちは気を紛らわせて悪戯してみたけれど、一方通行の行為ほど虚しいものは無いと感じてからは、人と関わることを止めた。

……まるで何処にも繋がっていないパソコンみたいだ。あるいは、自己満足で送信する片道メールみたいな。

「……どうしてすぐに声をかけてくれなかったのかなあ」

「……」

「そうすれば、こんなに悩むことなんてなかったのに」

「悪かった」

真っ白な角と黒い羽を生やした姿でお辞儀して謝るクリフの姿は、ハルにとつてとても愉快なものだっただろう。自分が悪魔を謝らせているのだ。今まで娯楽がなかった分、今ぐらいは存分に楽しませてほしいと、ハルは思っていたに違いない。

「その角、なんの角なの？」

「……山羊だ。もともと山羊というのは黒ミサで生鬘によく捧げられてな、生殖力の強い山羊は環境を破壊……」

「お手紙、食べれる？」

「……なんかハル、私のイメージとは違うぞ」

「そのくろい羽は？」

「これはコウモリの翼だ。コウモリは、鳥類の広大な繁栄範囲のスキマ埋めるようにして、繁殖していった鳥でな、それが人々の心のスキマを……」

「超音波びびびって出せるの？」

「……むう」

「ふふ。それで、その悪魔さんはぼくのことどのくらい知っているの？」

「……ハルの置かれている立場なら」

「そりゃね。だってユーレイだもの。何かに後悔してるからこんな状態になってるんでしょ？」

「そうだ。けど、残念ながら、ハルが何に後悔して浮遊霊になったのは、分からない」

「あれ？ そうなの？」

「神通力があるわけじゃない。ただ、この姿になることと、ハルみたいな反転世界に属してる人間を見て、触れることが出来るだけだ」

「ハンテンセカイ？」

「……私は説明がヘタでな。もつと説明が上手い奴がいる。ハルをそいつのところ連れていくために、こうして接触したんだ」

「なんかイヤだな」

「なぜ？」

「だって口が達者なんでしょ？ いやだよ。そんなやつ」

「……私もそうだ。けれど、助けるためには奴の力が必要なんだ」

「じゃあそいつのところに行く代わりに何か一つ面白いこととしてよ」

「……悪魔殺しだな。……頼むから私の言うことを聞いてくれ」

「えー。じゃあそれ以外だったらいいよ。なにかある？」

「ハルの口から話を聞きたい」

「ぼくが父さんを殺したこと？」

それを聞いて、クリフはぼかんとした、馬鹿みたいな表情を浮かべた。

「そ、そそ、そうなのか……。まさか、ハルがそんなことをなあ……」  
「……」  
「やけに拳動不審になっている様子を見て、ハルも鳩が豆鉄砲くらったように体を固める。」

「……え？ 知らなかったの？ 悪魔なんですよ？」

「ほ、本当にさっき言ったことしか出来ないんだ。う、うう嘘じゃない」

「じゃあ、何しに現れたの？」

ハルは首を傾げた。

たしかに、ぜんぜん悪魔っぽくないぞこいつは。

クリフはあわてて咳払いし、弁解し始める。

「いいか、浮遊霊っていうのは針が振り切れた人間がなるものだ。」

「本当はそんな非常識な存在が居てはならないんだ」

「やっぱりクリフはぼくを連れていくために現れたの？」

「そうだ。私はお前の存在を消すために現れた」

「じゃあぼくは地獄に行くんだ。悪魔のお出迎えーって。ちよつとは想像してたけど」

「悪魔も天使も関係ない。……さつきお前が天使なんか見てはいないと言っていたが、そもそも天使なんか存在しない。善の存在なんか、人の心の中にしか存在しちやいないんだ。私は、その人の良心に沿った姿になることができる。そして、その姿で霊の執着を解消して安心させる。それが仕事だ」

そういつて、クリフは黒い翼をばさばさとはためかせた。

「……良心？」

「人が自分の生涯を罰するに最も相応しい存在……人によっては、天使に見えるし、悪魔に見える。たいていは、この世のものではない神聖な容姿に見えることが多いな。ごく少数だが、違うものを見たりする人もいる。私のことをブタのぶーちゃんと呼んだ霊もいた」  
「ぶつ……あはははは、なにそれ」

腹を抱えて笑ってしまう。この軍人のような目見形の大女が、

ブタって、そんなのない。その人はブタに何をしでかしたのだろうか。もしかしたら、ブタを崇拜していた宗教に入信している教徒なのかもしれない。それを想像すると、わらけてしょうがない。

ハルがけらけら大笑いしていると、クリフは珍妙な面持ちで、

「……実のところ、お前の目に私の姿がどう映っているか、私は知らない」

といった。

「え？ だ、だって山羊の角と、こ……コウモリの翼が……って」  
「悪魔といたら山羊の頭とコウモリの翼。そう思っただけだ」

「変身するような呪文とか、素振りとか見せたじゃんか」

「あれはただのフリだ。急に見えたら驚くだろうし、安っぽく見えるから、しただけのことだ。本当はなろうとすれば、一瞬でなれる」

「それじゃあ……」

「ふう。だから私は嫌いなんだ。この姿になるのが」  
ハルは笑いを止め、クリフの出で立ちをもう一度ゆっくりと見直した。

それはどこからどう見たって、悪魔以外のなにものでもないけれど、霊によっては天使に見えるときもある。黄色い輪っかをつけて、鳩の羽を背中から生やす。そして、そのことを本人は知らない。その状況を想像してみた。

ある人は喜ぶだろう。救いを差し伸べてくれる天使が現れたのならば。けれど、ほとんどの人はそのような天使は見えないのではないか。だいたい考えてみれば、天使が見えるような人は浮遊霊何かにならないのではないか。

悪魔に見える人ならごまんといそうだ。例えば、お金をだまし取ってしまった人とか、友人を裏切ってしまった人。そして、人を傷つけ殺してしまった人。どれもこの世界に溢れている。その後悔している霊たちには、クリフが恐るべき悪魔に見える。クリフはそれに気づかない。クリフを見て、罵り攻撃してくる人もいただろ

う。あるいは、叫び声をあげて逃げ走る人だっていたかもしれない。逆に土下座して謝り続ける人だつて。

それはとてつもなく可哀想な光景だ。

「フビンだね」

「やめてくれ、少し悲しい」

「話は分かったよ。けど、執着を解消するのに、その人を知らなきゃダメなんじゃないの？」

まさにいいこといった！ といいたそうな晴れやかな表情で、クリフは頷く。

「そうだ。そのとおりだ。本当ならそれ専門のヤツがいるんだ」

「あー連れていこうとしたその人のこと？」

「そうだ。変わり者の小説家でな、すごく忙しい。だから連れていくしかないんだ」

やつとこさ話がつながった。目の前の悪魔は浮遊霊である八ルを消すことが仕事。仕事をこなすためには、霊のことを知らなければならぬ。けれど、そんな能力はこの悪魔にはない。だから、霊の話を聞かなきゃいけない。もしくは人の過去や悩みを知ることのできる能力を持っている人のところに連れていく。

全てまとめ終わってから、また数分の沈黙が流れた。

今まで頭を垂れていハルは、ぴよんと頭を上げ、隣に座っているクリフを見上げた。パーカーフードが楽しそうに揺れる。

「ほっんとクリフって」

「なんだ？」

「説明へたつぴだね」

「……」

項垂れて落ち込むクリフをみて、気にしていたのかな、とハルは思ったらしく、「いや」「その」と弁明に必死になる。

本当はもつと言いたいことがあったのだらうけど、その言葉たちは胸にしまい、代わりに何か慰めの一つでもいってあげようと声を掛ける。

「説明はへたつぴだけど、」

「もう、よしてくれ。分かってはいたんだ。この仕事にむいてないんじゃないかってな」

「ちょ、ちょっと話とちゅう！ いいヤツだつて言いたかつたんだよ」

落ち込んだクリフの肩がぴくつと上下する。

「コーヒーだつて、ぼくが飲めやしないのわかつてて、それでも持つて来てくれたんでしよう？ ねぎらいの気持ちってコーヒーって相場が決まつてるしね！」

「あれは実は自分の……」

「小石だつて、気を利かせて上に戻してくれた。ここにくる人なんてほとんどいないけど、ジョギングしてるじーさんが、下に積みまれている石の数を数えてたらびっくりしちゃうもんね！」

「いや、それは……その……」

聞こえないふりして両手で両耳をぺたんと折り、次句を言い放つ。「もっともーつというつと、転びそうになつたぼくを助けてくれたじやんか」

「……よせよ。照れる」

ハルはガッツポーズする。クリフは頭を下げていたので、それに気づかない。どうやら悪魔のガラスのハートを守りきつたみたいだ。

「ふう……ぼくも面倒な人間だけど、クリフも大概だよ」

「そ、そうか」

「褒めてないつてば。顔を赤らめないでよ。……だいたい、クリフの望みがぼくを消すことで、そのためにある人物のところに関連していくのが近道なら、さつと姿を表して、手紙でもなんでも置いとけばいいんだよ。』ここにお前の望むものがある。住所は』つてさ。そんならどんな浮遊霊だつて一目散だよ。いや、笑い事じゃなくねめちやくちや暇なんだよ？ 浮遊霊つてさ。んで、時間があるから変なことばっか考えちゃう。……話逸れちゃったけど、やつぱどこをどー理屈つけたつて、ぜんぜんぼくと話する意味ないじゃん」

「……だが、そうとも限らなかつたぞ。悪魔を見れば、ほとんどの霊がぺらぺら過去を語りだす。だいたい恨みつらみがあるヤツが死んだ後、霊になるんだしな」

ハルはため息を大きくついて、肩を落とした。

「はぁ……。だーかーらー。そうじゃない霊だっているじゃん」

クリフはぽかんと口を開けて馬鹿みたいな表情をしている。

「ぼくは絶対話さないし、その人のところなんて行きやしないよ！クリフはその言葉を受けてさらに驚いた様子だった。

「なぜ？ どうしてだ？ その気になつたら私がハルの望みを……」

「それじゃあ意味がないんだってば」

「後悔を解消してやるのにか？」

「解消してやるなんて思っている人に解消して欲しくなんかないに決まってるじゃんか！！」

「……しんじられない」

「ぼくだって信じられないよ。クリフが今まで霊を消してきたことが」

「そ、そうか？」

「褒めてないってば」

「……よく、木偶の坊だとか、役たたずとか言われるのだが、やっぱりそうなのか？」

「疑問形で聞かないでちょーだいよ……。とつても答えづらいからそれってどういう意味だ？」

不思議そうに自分を見つめるクリフを見て、ハルは頭を掻く。

「あー！ もう！！ この悪魔どうにかしよう……」

「どうにかって言われてもな……。取り敢えず、お茶でもどうだ？ それでゆっくり話を……」

「お茶！ 飲めないの！ ぼくは！ ……もしやコーヒー飲めると思ってたってきたの！？」

「……ふふ」

「笑ってごまかすなっつーのー！！」



クリフはそれを聞いて、泣きそうな表情に様変わりする。そこでハルは口元に手をあてた。悪魔の心はガラスハートだったということとを思い出したのだろう。

「あつ……ごめんごめん。ごめんね？　そこまで言うつもりじゃなかったんだけど……」

「ぐすつ」

「めっ……めんどくさっ」

ハルはため息をつく。

「あーもう分かったよ。その人のところに連れてって」

「ほ、ほんとか！？」

「……きつとその人、上司か何かでしょ？　なんだか無性に会って話たくなってきた。きつと心が通じ合うと思うしさ」

「ハルならそう言ってくれると信じてた」

泣き顔から、一気にきりつとした表情に早変わり。ハルはその様子細目でみていると、思いついたように言う。

「おもしろ百面相……！」

クリフにぴったりのいいあだ名を思いついたらしい。

「何なんだそれは」

ハルは、パーカーフードを深くかぶり直し、頭を振る。きつと、自分のネーミングセンスを疑ったのだろう。

「……じゃあその人のところに行くよ、クー」

「クー？」

「あだな。クリフっていうより可愛いでしょ？　それともブーちゃんのほうが良かった？」

「……クーか。わ、悪くないな。そしたら私は……ふふ」

「何考えてんのか分かんないけど、ハルでいいよハルで。っていうか、どう考えたって、クリフにあだ名のセンスがあるとは思えない」

「ふ、ふふ。そうか？」

「……」

やれやれ。

……私はハルの代わりに深くため息をついた。

本当に、すっかりハルちゃんを消すことができるのだろうか。

6

軍人のような容姿をした悪魔は、鳥居の傍までいきハルになにやら告げると、また公園に戻ってきた。もちろん私と話すためだ。

もともと、クリフという偽名を使用している悪魔は、私を消すためにやってきた。私はもちろん霊である。浮遊霊ではなくて、地縛霊だけだ。

地縛霊と言えば、その土地に佇み続けるのが有名だろう。例えば、人が良く死ぬ高速道路とか、人が良く死ぬ峠道とか……思いつくものはたくさんある。

私の場合は神社だった。前例とちよつと違うところは「人がよく死ぬ」ではなく「人が良く死んだ」神社であるという点。前者は現在進行形だが、後者は過去形。そのため、今はどうといったことは無い神社であるはずだけど……都市伝説って怖い。

この「首なし神社」は、本来は「公家なし神社」という愛称が訛つたものであり、首なしなぞ全然関係はない。そりゃあ一体二体はそういう死体があったかもしれないけど……少なくとも現代の時代で、そういった事件が頻繁に起こったわけでもない。そもそも首の無い死体なんていうサスペンスめいた死体はそうそうない。

そんな怖いどころか逆に高貴な響きに聞こえてきさえする「公家なし神社」は、いつの頃からか「首なし神社」として巷で有名になり、あられもない噂が四方八方に飛び交っていく。その事例は……お察しの通りだ。

余談だけど、この神社が「公家なし神社」と呼ばれている所以というのは、この北海の地にゆかりがある。もともと熊を崇拝していた土着民が、南から進行し支配しようとする幕府の人間と喧嘩をしていたという歴史背景が関係してくる。

幕府の藩士はどうしてもこの土着民を和人にし、支配したかった。なぜなら、体だけは頑丈で何よりも純朴な気質である土着民の仕事ぶりが、土地を開拓するという単純作業にぴったりだったからだ。だからこそ、民族を統一し、領土を広げようと自国の神を信仰させるために、適当な場所を選んで、神社をむりやり建立した。対する土着民は、自ら信仰する神（熊だけどね）を否定され怒り心頭阿鼻叫喚。なぜならその場所は土着民にとってなによりも神聖な場所であつたのだ。

あわてふためいた藩士たちは、これも何かの好機だろうと、あの手この手を使って土着民を言いくるめようとする。何をいつたかしないけれど、決して謝りはしなかったのは確かだ。その不義な姿を見てとうとう怒りが爆発し、土着民は決起した。

幾度となく殺し合いをし、大変な争いが始まってしまった。……けれど、始まつた争い事というのは例に漏れず蠟燭の明かりのように、いつしか鎮静するものである。

その当時、もっと別の遠い場所で激しい戦いが本州との間で繰り広げられていて、そっちの戦いに多く戦力を裂いていた幕府は、結局土着民のこだわる神社を放置した。

そうして出来上がったのがこの「公家なし神社」……お上の目が行き届かない神社の意味でそう呼ばれていた、といういきさつ。すぐくどうでもいいかもしれないけれど、念のため。

もちろん私だって、あの時まではどうでもいいと思っていた。けれど、そんな私が土着民の天罰をうけ、首なし死体になるなんてさ。私は吐けもしないため息を吐く。

……ある事情で大事な子供を殺してしまった私は、失意のうちに自殺することを決意した。

出来るだけひと目につかない場所を探し、見つけた死ぬにはうつてつけの神社で太縄をカエデの木にくくりつけ、首を吊った。とても痛かったけれど、しだいに頭がぼーっとしてきて気がついたら、こめかみに鈍い感覚。何かが私の頭をカジカジ噛んでいた。

……もうわかるとは思うが、それは野生の熊だった。

私は、薄れゆく意識のなかで、首がもげてしまつたのを想像した。そして、現在進行形で霊となった私は、首のない死体が木からぶらさがっているのを発見する。

そうして首のないまま霊となつてしまった私は、何故か神社と公園の間しか動けないことを知る。きつと熊に頭を食われなければ、地縛霊ではなく浮遊霊になれたのだろう。それに……ハルちゃんとお話出来ただろう。話すつもりは毛頭ないけど。

そうして、かなり長いあいだ神社と公園の間をうろついていた。そこで姿を見せたのは、頼りない悪魔さんだった。

その悪魔は、キリンの滑り台に身を潜めて様子を伺っていた私の目の前に着くと、こういった。

「話の途中ですいません。お待たせしました」

いいえ。

声が出ないことに気がついて、私は彼女の大きな肩に手をかける。彼女は気づいて、私の置いた手を握った。

ずうつと見てたのよ？　ほんとにハルちゃんを助けてくれるのかって。

私はそういうと、鳥居の裾でつまんなそうにポケットをまさぐっている少年のほうをちらと見た。

クリフは申し訳なさそうに苦笑いを浮かべる。

「私は口下手で……そのせいで思ったほど時間がかかってしまいました」

もう、しっかりしなさいな。あなた、格好いい大人になりたいでしょ？

私は大げさにため息をつく。いや、実際にはついてるわけじゃない。つくほど、この少女みたいな悪魔にあきれているのだ。

あれじゃあ、全然格好よくないじゃない。ハルちゃんがリードしちゃっているでしょうに。

「……はは」

面目ないと、情けない表情を浮かべるクリフを見て、私は安心した。だって、彼女なら……この悪魔なら、私が子供に出来なかったこと全て、してあげられる気がするんだもの。

自分で自分に言い訳して、背伸びしてクリフの頭を撫でてやる。私だって、撫でる腕はきちんと持っているのだ。

無理するんじゃないの。大丈夫。あなたならきっと、誰よりもあの子を見てあげれるから。

「……………」

……………。

神妙な面持ちなクリフを見て、この悪魔のいわんとしていることを悟る。

会いたくないって本当よ。だって私には会う資格なんてないもの。そうでしょう？ 子供を殺して自分も死んだ大馬鹿な人間が、人様の前に姿を表せれるわけじゃないじゃない。

「どうして……どうしても自分の子供を殺さなければいけないかったですか？」

どうしてもに決まってるじゃないの。あきれた。

だって、毎夜酒を飲み、男たちを癒す仕事をしている自分には産むだけの生活力なんかなかったのだから。学校も小学校しかでておらず、暴力をふるう親たちに耐え、雇ってくれる場所なぞ男の相手をする仕事しかなかった。本当は子供が大好きで、保育士を目指していた時期もあったが、資格を手に入れるだけのお金は全て、病院で寝たきりの両親の手術費に消えた。

……………どれだけ憎くても、自分をこの世に生んでくれた親だもの。そりゃあ……………ね。

だから子供をおろした。この世界には食い扶持というセーフゾーンがたしかに存在するのだ。そして、その食い扶持を確保したうえで、計画的に子供を産み、大学まで面倒を見てあげなければいけない。それが出来ない人間は、親になることすら許されない。そう、自分を重ねみて、私は思った。そうしないと、私みたいな人生を送

ることになる。だから負の連鎖を断ち切った。断ち切らねばならなかったのだ。

出会った相手も馬鹿な男だった。くたびれた飲み屋で出会ってしまい医者という真っ黒（服装的には真っ白だけど、この場合は悪徳といった意味で真っ黒ね）な立場をちらつかせ、それを信じて一夜を共にし、子宝を授かった。そんな三文芝居によくある筋書きだけど、私にとっては人生を変えるチャンスのように感じられた。

そのあとは、いいように言いくるめられ、札束を握らされ、その男の手で墮胎手術を受けて……という話。子供の墓を立てるとあつという間に札束はかすみのごとく消えてゆき、気づけばなんにも残っちゃいなかった。そんな人生に価値なんてあつたのかしら。

いつも思うのは生まれるはずだった子供のこと。男の子か、女の子か、名前は何にしようかと叶うはずのない夢を膨らませる毎日。

ねえ、私の子供ってきつと生まれていたら、いまごろハルちゃんぐらいの年だったと思うの。

「……………」

そう思うたびに、ごめんなさいね、許してちょうだいって気持ちになるの。ねえ、もし私がハルちゃんの前に姿を表したら、どうなっていたと思う？

「……………わかりません」

クリフは頭を振った。

そう、それでいいのよ。だって、あなたは人を救うんだもの。そんな悪い女のいやしい気持ちなんて分からなくていいの。ただあなたは、真っ直ぐに、前を見て頑張っていくのよ。

私は無い目を閉じる。すごく不思議な言い方だが、五感がこの体にはちゃんと備わっているのだ。そして、この反転世界の姿は、死んだ時……いや、死体と同じ姿になる。私には首がなく、こうして悪魔に触れないと話すことが出来ないのもそのためだった。

ハルちゃんはとってもつらい人生を歩んだ子よ？ 私の望み通り、ちゃんと消してあげることが出来るかしら。

「……大丈夫だと思いません。多少くじけるかもしれないけど……それでも私は消さなければなりません。……それが私の仕事だから」  
そう、と私は心の中で言う、ハルが三日月を見上げていたちょっとの際に掠め取っていたものをクリームカラー色したロングコートのポケットから取り出し、彼女に手渡す。

それは、ただの平たい小石だった。

この小石、私が見つけたのよ、いいでしょう。

「ええ。とつても。これ、なんですか？」

ハルちゃんのお気に入りのお石よ。お百度参りの回数を数える度に、私が何度もお石を戻してあげていたけど、これがその石の山の一番上に必ずあったの。必ず決まって百個目にこの石を選んでいたら不思議でしょう？

「それ、本当ですか？」

もちろん。伊達に……いや、言うべきじゃないわね。忘れて。だから、これをあなたに渡すわ。もっててちょうだい。これで私は安心して消えることが出来るから。

クリフは何も言わずそれをつかんで、ジャージのポケットに滑り込ませた。

ふふ、私、最後はこの石を絶対選ぶとってたの。けど、違ったのね。少し残念。

「……これで望みは叶いましたね」

私は、下ろしているほうの手をきつく握った。もう十分。もう十分だ、と自分に言い聞かせる。

……消えたら、どうなってしまうの？

「消えたら……ですか」

そう、私はある程度の説明をこの悪魔に聞いていた。もちろん、これからハルが向かうであろう人にも会って詳しい説明は受けている。その人の話では、こんな世界に私たちは住んでるみたい。

普通の人々は、神の怒りを受け、地上に墮とされた（なんか神さまって人間ばいのね）天上に棲む人たちの願いを宿して生まれてく

る。その天使たちのせいで、悩んだり悔やんだり……人を殺したりする。そんな感情的に物事を考えてしまう子供っぽい神は、天使に試練を与える。天上に棲むお前がどうして、何をして墮とされたのか、それを考えて見つけ出し、解消できる人間に願いを託してこいなんて。

つまり、現実世界は天使たちを助けるための世界ってやつらしい。だけど、秩序ある世界からはみ出してしまった霊たちは、悪魔に消されるまでこの死ぬことのない世界で『天使たちの願い』を完遂することが出来る。そんな知らぬ罪を贖ってしまえば、すなわち生を完成させることが出来る。

……ほんとうにこんな話を聞かされた。そりやもう私だってびっくり。こんな首なし地縛霊じゃなきゃ信じなかったと思う。

ま、言い回しはむづかしいけど、要は人間は生まれながらにして天使が隠してしまったパズルのピースを見つけると宿命みたいなものがあるって、その欠けたピースを探し、埋めるために人生を生き続けるってわけ。もし、その人生のゴール地点手前で力尽きてしまえば、もう一度トライ。生まれ変わってハイスタート。それが普通の人なだけで、私たちは勝手が違う。力尽きることなく、欠けたピースをずっと探し続けることができるのだ。そうしないと消えることができないから。

霊は欠けたピースを見つけ、この生ぬるくてぐずぐずした世界からやっとなることが出来る。そうして、生を完結した私たちは、何も残らず消えてゆく。

私はその話を聞いたとき、不公平じゃない!? と思った。そんな話っていない。覚えている悪いことなら、ごめんなさいできるけど、身に覚えのない、しかも見たこともない天使の犯した過ちを謝るのってなんか納得いかないじゃない。

……でも、悪くないと思った。だって誰かのために頑張ることができるのだ。そう、ハルちゃんのように。

こほん。どうやら話が逸れてしまったみたい。



ここで私が聞いているのは、その後だ。生を完遂したら、私という存在はどうなってしまうのか、それが知りたかったのだ。

「そうですね、消えたら……望みを託した天使たちに会って話をすることができると……その話は聞いたでしょうか？」

ふふ。そうね、安心したわ。

「すみません。では……」

そういつて、悪魔は私の肩に置いてあった手をぎゅっと強く握り、何処から取り出した大きな鎌を振り上げ、私の脳天（といっても頭なんてないのだけれど。ふふ）目掛けて振り下ろした。あつという間のことだったから、大鎌で体が切り裂かれたことに気づくまで少し時間がかかってしまった。

体を二つに引き裂かれながら、私は意識がぼんやりしていくのを感じた。薄れゆく意識のなかで、地縛霊になってから見てきたことを思い出す。その思い出は、ハルばかりだった。

一人言をよくいうハル。

寂しそうに公園のベンチでうずくまるハル。

絶対ハルちゃんなら大丈夫。けいちゃんを助けることができるとは、はずだから。

きつと、熊に頭を持っていかれなかったなら、話すことだって出来たでしょうに。

私は、鳥居に立つハルの姿を目に焼き付けた。ハルはしゃがんで、寒そうに震えていた。

それが私という存在の最後だった。

……

……

クリフは消えてゆく霊を見送って、握った石をじいっと見つめる。石は平たくて、ハルにとって特別でありそうな特徴はなかった。

何が決めてでこの石を選んでいたのかクリフには少しもわからなかった。

麒麟の滑り台にぼうつと立っていたクリフは、鳥居のほうを向く。そこにはハルはいなかった。

「おーそーいー。寒いんだから早くいこうよ」

どうやらハルは、滑り台でぐずぐずしているクリフに業を煮やし、近寄ってきたみたいだった。

「ああ、すまん」

ハルはそれでも、納得のいかないように腕を振り回して抗議する。そのうちに、クリフの見ていた石に気づいたのか、素っ頓狂な声をあげた。

「そ、それ、どうしたの？」

「ん？」

「その石、どこで拾ったの？」

クリフは口をもごもごと動かす。どう言おうか考えてなかったせいで、少し間が空いてしまう。

「……これは、賽銭箱の近くに落ちてた石だ。これだけ遠くに飛ばされていてな。それがどうかしたか？」

ハルは、疑いの目でクリフを見つめる。

「ふーん」

「なんだ？」

「嘘つき」

「え？」

「……それ、ちゃんと賽銭箱の傍にあつたはずだよ？」

クリフの体が一瞬固まる。

「え………そ、うなのか」

それを聞いたハルは頷く。けれど、目は疑いの眼差しのままだ。

「そうそう。今日はぼく、その石をちゃんと賽銭箱の傍にわかるように置いておいたんだ。だって、その石は特別なんだもん」

「………というと？」

「あのね、ぼくがこの神社に来て始めての日の話だけど………その小石が少し動いたの」

「そんなこと、あるはずない」

「そう思うよね。ぼくもそう思った。もともとその小石は、本殿から離れた木の下に落ちてたものなんだ」

「へえ」

「その小石のね、動いた音が聞えたから、誰か人間が蹴飛ばしたのかと思ったの。もしかしたら、ぼくと同じ霊なのかもって嬉しくなったりもしたんだけど、その小石が動いただけで、いくら話しかけても反応はなかった」

「ハルの勘違いだったんじゃないのか？」

「ぼくもそう思った。だから、その石まで近寄って触ってみた。：

…す、る、と？」

ゴクつとクリフは喉を鳴らす。

ハルは気を良くしたのか、口をすばませて微かな音量でいった。

「温かかったの。小石が」

「んな……馬鹿な……」

「そうそう。ありえないよね。ふふ。けど、本当に温かかったんだよ。と、いうことはどういうことだと思う？」

クリフは、さっきまでハルと話していた時のことを思い出し、どうリアクションすべきか考えた。こんなときはそう、目をパチクリさせればいい。

「……どうということなんだ？」

「ほんつとクーは馬鹿だなあ。ぼくみたいな霊が握ってたか、それとも人がいたかに決まってるじゃん。……もしくは、あ、く、まがいたか」

「私はその石を握ってたと？」

「当然……といたいところなんだけど、クーの様子を見て、やっぱり違うなって思った」

クリフは、頭の中でハルの気持ちを推理してみる。

ハルは、温もりの残っていた石を特別扱いしていた。そしていつもお百度参りの数かぞえに使っていた。

けれど最終日はその石を選ばなかった。

「……………さっぱりわからない」

小首をかしげてしまう。

「クー、何がわからないの？」

そう言われて、クリフはハルに疑問をぶつけることにした。

「ハルがこの石を特別に扱っている理由はわかった。お百度参りの初日に突然動き出し、さらには温もりさえ残っていた小石だったから、でいいな？」

「うん。そんで、その特別な石をお百度参りの数かぞえの最後に使ってたんだよ」

「それは……………なんでだ？」

「もちろん、もうぼくはここには居ませんよって合図に決まってるじゃん」

「……………は？」

「いい？ ぼくだってずーっとこの神社にいたわけじゃない。日中は山を降りて、ふらふら移動してた。通ってた学校とかに様子見に出かけたりとか、デパートにウィンドーショッピングしたりとか……もちろん誰も声をかけちゃくれないし、ぼくからだって何もコンタクトをとろうとはしない。そんな、一人ぼっちの世界。寂しさのあまり泣きそう……………そんで、ふいに霊か、霊のようなものが現れたような気がしてごらん？ 絶対お話ししたくなっちゃうでしょ？」

「そう、だな」

「だから、この小石が目印になるようにしたの。お百度参りが終わったよ。だから神社にはもう居ないよっていう合図。今日は閉店しましたよってね」

「なるほど」

「……………もしかしたらだけど、この石が自ら動いた可能性も考えついた。そう考えると小石が特別なものに見えてきて、何度も持つて歩こうと思っちゃった。けど、やっぱり石は石だもんね」

確かに、そう思っても仕方がないかもしれない。霊のほとんどは、

自分が何故霊になつてしまつたのか分からず、自分で自己分析をするしか方法がないからだ。

……だから、地縛霊だつた彼女のように奴の出鱈目にまんまと騙されてしまつ。

「じゃあ、最終日、なぜその石を最後の石に選ばなかつたんだ？」

「もちろん選ぶとはしたさ。けど、止めた。クーが現れる直前まで、霊だつて確信してたから。だから、この小石は賽銭箱に置いておくことにしたんだ。ほら、これ」

といつて、ハルはポケットから角張つた小石を取り出した。

「それは？」

「お百度参りしたよーっていう証明したいなもんだよ。ぼく決めてたんだ。最後の石は持つていこーって」

「その小石はお百度参り最後の小石か」

「うん」

「……なぜ霊と確信したんだ？」

「んーなんとなく、かな。ずっと誰かが神社の中に居るってことだけは分かつてたんだ。雰囲気つてやつ？ 落ち葉がパキつて音を鳴らすし、階段の横に生えてる木の近くで石が動くし。そんで、初日からずーっと声をかけ続けたりしたんだけど、なんにも返事がないから諦めちゃつた。でも、絶対いたと思うんだよね。クーはその人と話をしたんでしょ？」

「……いや」

「ほんとーかな？ 知ってるんだぞーほらほら、話してみい」

「……ハルの望みを話してくれたら、全部話す」

「くそー卑怯だぞー！！ 鬼！！ 悪魔！！」

「……だから悪魔なんだつて」

そうして変わり者の二人は落ち葉を踏みながら公園を抜けた。

二人の頭上を覆う夜の空から、ぽつり、ぽつりと白い粉のようなものが降り落ちる。

白い粉は二人に触れたとたん雪に変わり、二人に冷たさを感じさ

せた。

溶けて熱を奪っていく雪は降る勢いを増し、雪雲はいつの間にか満月をすっぽり隠してしまった。

雪が降り始めたのだ。

## 少女Hと少年K

週刊 12月30日

速報 新聞警察担当の記者A、裂目町少年K事件を語る

12月28日の午後12時半ごろ、裂目町の閑静な住宅街のある住宅で殺人事件が発生したとの通報があった。

通報したのは現場の住宅に住む被害者の妻、遠藤美鈴さん（46）

美鈴さんは「夫が殺された。息子が殺した」と通報。現場に駆けつけた警察の話では、遠藤隆さん（48）と思われる縊死遺体をリビングで発見。また、同住宅の二階の一室で首を吊って自殺未遂を図っていた少年を発見、確保したとのこと。少年は確保された後、意識不明の重体で総合病院に搬送された。

後の調べで自殺未遂をしていた少年は隆さんと美鈴さんの長男の少年K（17）であることが判明。

警捜一課は、遺体の首に縄の痕があり、少年が首を吊るのに凶器と思しき縄を使用していたことから、この事件を「少年Kが父親を絞殺し、凶器を使用して首吊りを図ったもの」とみて捜査を進める方針だ。

この事件、いくつか不思議な点が挙げられ噂になっている。

例えば、隆さんの遺体には顔面が破壊された痕があったらしいこと、事件当日見知らぬ大柄な男が現場近辺を徘徊していたらしいこと、などなど。

今回は、このミステリアスな事件について、新聞の警察担当記者Aさんと噂を交えながら対談した。

今日はよろしくお願いします。

A：よろしくお願ひします。

警察担当記者であるAさんは警察の事件調査に動向していたみたいですが、やはり捜査の進展は望めなさそうですか？

A：そうですね。事件当日の様子を知る人は亡くなったか錯乱、意識不明ですからね。

顔面破壊された遺体

遺体の状況が伏せられていますが、実際どういった様子で発見されたのでしょうか。

A：え？ ああ、そういえば新聞や記者会見では規制かけてましたね。いいのかな。

お願ひします。

A：（頭をかく）……一階のリビングでうつぶせになって発見されました。それで、ごろんと転がしてみると顔面が破壊され、首に縄の痕。それで絞殺と。

顔面が破壊されていたんですか？

A：誰かわからないほど殴打されてましたね。皮がべろんと捲れて、血で滅茶苦茶でした。検死の話では、殺害された後に人の手で殴られた傷だと。けど、私には何か鈍器のようなもので殴ったのではないかと思っています。だって、どれほど凄い力で殴っても普通あはなりませんよ。

鈍器は見つかりましたか？

A：残念ながら、鈍器は見つかってません。この鈍器が少年の手にも握られればあつという間に解決するのですが。まあ、検死官が顔面の傷は人の手によるものと断定しているので、あくまでも鈍器云々は私個人の見解です。

少年の拳には殴った時に出来る傷などはあつたのでしょうか。

A：（苦笑いを浮かべながら）ただ首を吊ってただけ。だから不思議なんですよ。一体誰が殴ったんでしょうね。



現場近隣をうろついていた大柄な男とは？

そのとき現場には第一発見者で被害者の妻であるMと少年Kしか居なかつたんですね。事件当日の午後11時ごろ、現場の裏手の小道で大柄な男を見た目撃情報があつたらしいですが……その人物がやつたのでは？

A：大柄な男ですか？

ええ。子供では鈍器を使わなければ顔面を破壊出来ないと思います。大柄な男が事件現場に居て、殴打したのであれば……。

A：事件現場にいた形跡があれば話は早いですけど。現場には被害者家族の指紋や毛髪しか検出されなかつたみたいですし、証拠隠滅したような不自然な拭き取りなどもなかつたみたいですよ。

では完全に現場には居なかつたことになりませんか。

A：さらに、大柄な男の目撃者は、翌日には大柄な男なんて見えないと証言を引っくり返してしまいましたし、男の容姿も不明確でしたから。だって、ジャージを着ている180〜190ぐらいの男っていう容姿だけです。せめてジャージの色やメーカーなどが分かっているといいんですけど。

何故目撃者は証言を訂正したのでしょうか。

A：さあ……。ただ、訂正するときにはちょっと様子がおかしかつたみたいですね。警察は目撃情報を今でも信じて捜査しているみたいですが、目撃者がその人ひとりだけだったので、大柄な男探しは難航しているみたいですよ。

遺体の隠された外傷、その意図は？

遺体は顔面を殴打されただけではないと聞いたのですが、何か他に外傷があつたのでは？

(しばらく無言)

A：発見当初、ただの絞殺死体だと思っただんですが、その……ズボンを脱がしてみたら、男性器が根元から切り取られていたんですよ。断ち切りハサミを使ったような切り口でした。でも、これも顔面の外傷と同じく亡くなった後に切り取られたらしいですよ。

被害者の性器や断ち切りハサミは見つかったのでしょうか。

A：……いえ、どちらも見つかってないですね。これも少年Kが握っていた話は早かったですけど。住宅内はもちろん、埋められた可能性もあるので敷地を隈なく探していますが、今のところは見つかってないですね。トイレに流したかもしれないので下水道も探していますが、これも今のところは。

何故切り取ったのでしょうか。

A：昔あつたじゃないですか。そういう事件。あれを一度したかったのかも……。でも分かりませんね。被害者は女遊びしていた訳でもないみたいです。性関係のもつれや怨恨って線は今のところないみたいです。

被害者が死亡した後、通報までの空白の30分。MとK母子は何をしていた？

死亡推定時刻は午後12時だったと聞きましたが、通報するまでの30分Mと少年Kは事件現場の自宅で何をしていましたのでしょうか。

A：そんなとこまで知ってるんですか。私が話す必要のないのでは？（笑）

いえいえ（笑）で、30分間何をしていましたのでしょうか。

A：通報者のMさんの話によると悪魔と話していたらしいです。悪魔？

A：ええ。デーモンやデビルの悪魔ってやつですね。山羊の角を頭から生やし、コウモリの翼をばさばさと（笑）……といつても、精神錯乱している状態での証言ですから何処まで信じていいか。ま、

参考程度であまり有力な情報ではないですね。

まさに眉唾といった証言ですね。MとKの二人が共謀して行なった事件なのでは？

A：無いです。Mの錯乱振りは相当酷いと聞きましたから。ものをまともにも言えない状況らしいですし、第一動機が見当たらない。Mは被害者に従順だったようで気の弱い質と聞いてますから、顔を粉々になるまで殴るのは考え難いと思いますよ。

ですが、何か積年の恨みがあつたのかもしれないですよ。

A：あつたはあつたでしょうが、息子が夫を絞殺するのをただ眺めてるでしょうかね。もし恨みが二三あつたとしても、犯罪に及ぶほどであればすぐ調べはつきますよ。発作的な犯行だとしたら有り得なくはないですが……それなら町じゅうの家のリビングに夫の死体が沢山転がってるんじゃないですか（笑）

Mが悪魔と話をしてる間、Kは何をしていたのでしょうか。

A：さあ……。でも首を吊つたのはMが通報したすぐ後でしょうから、考えられるのは性器と断ち切りバサミを捨てに外に出たとかすぐに思いつくのは裂目川でしょうね。ビニールにくるんで川にポチャリと。けど、警察も現場から15分で行ける範囲は大方調べているでしょうし。時間が経てば真相は明らかになるんじゃないでしょうか。

依然意識を戻さない少年K。正体は夢想家、存在しない少女H

少年Kの意識は今に戻らず、そのせいで捜査が難航しているみたいですが、Kはもともとどういった少年だったのでしょうか。

A：学校では割と目立ってましたね。あとは、正義感のある少年とも聞いてます。これは最新の情報なんですが、どうやらここ一年のあいだ夢想話を友人に対して頻繁にするようになったらしくて、それが元で事件の一ヶ月前から学校を休校していたみたいです。

夢想といえますと……。

A：夢想と一口で言っているのか分からないんですが、記憶障害に妄想癖が合体したような症状と話を聞きました。現実のものではないことを現実だと思ひ込むアレです。なんでも、知らない少女の名前を叫び出したり……その少女を仮にHとしておきますが、Hは父を殺して自殺した可哀想な子で、自分はHのたった一人の親友だとか……そういった架空のHの身辺を唐突に語りだしたり……まあ虚言を繰り返していたみたいです。

少年Kはどうしてそのような精神状態になったのでしょうか。

A：分かりませんね。彼の持ち物から、手掛かりが見つかるというんですが。

父を殺し、自殺未遂した少年K。同じような境遇の架空のH。関連性がありそうですね。

A：ですが……今の段階の調べでは全くの無関係とされています。Kの犯行の動機には関係してそうですから、調査は進めていくでしょうね。

やはり鍵を握るのは少年K

今のところ、警察の手にある捜査の証拠物件はなんでしよう。

A：事件現場で使用された縄……ぐらいのものだと言っていました。それも、被害者の唾液が付着していただけで……首を締めたときに付着したのか断言は出来ませんからね。

本当にそれしかないんですか？

A：私も全て把握しているわけじゃないんでね。全て把握しているとしたらやっぱり少年Kじゃないですか？

今日はありがとうございました。

A：まだ何か裏があると思いますが……残念ながら首を突っ込んでもいい形でおしまいとは到底なりそうもないと思います。

対談の最後に記者のAは深いため息をついていた。今回の対談では話終わったときにAが浮かべた陰鬱な表情が印象的であった。事件の全容を知るのは少年K一人である。何故Kは父親を殺害したのか、余計に謎が深まってしまった対談であった。（記事：T）

窓の外は、相も変わらず雪模様だった。それどころかさつきよりも雪の勢いが増してる気がする。

雪はとめどなく地面に向かって降り続けている。ベッドに座りカーテンの隙間から見える雪を眺めているうちに、だんだんと陰鬱な気持ちになってきた。

けーちゃんは私のおとうとでなんしょう？

確かに僕は三春姉ちゃんの四歳離れた弟だ。彼女は今年二十一歳になる大学三年生で、面倒見のいい、ただのありふれた、それでも僕にとつてただ一人の優しい姉である。容姿だって、そこらへんの大学生とさして変わらない。今だって、目を閉じればありありと三春姉ちゃんの姿を思い浮かべることだってできるのだ。そう、こんなふうに。

三春姉ちゃんは、少し茶色がかった黒髪だ。彼女はその黒い髪を腰まで伸ばしており、伸びた後ろ髪を緑色のヘアゴムを使って。そうだ、姉ちゃんは緑色のヘアゴムが好きだった。後ろで一つにまとめ、右肩へ流している。そして前髪を綺麗に切りそろえている。切りそろえられた前髪が目隠しているせいで全体的に地味に見えてしまうが、微笑むときだけ出来る頬のえくぼが魅力的だった。

背丈は僕よりも頭一つ分低い。三春姉ちゃんは、そのことを若干悔しく思っていた気がする。なぜなら、身長が僕より頭一つ分低いせいで背伸びしないと僕の頭頂部に手が届かず、手軽に僕の頭を撫でることが出来ないからだ。三春姉ちゃんは子供のころ、よく僕の頭を撫でていた。僕が怪我して泣きたくなったりときも、友達と喧嘩して苛立っているときだって……何も言わずにただせっせと僕の頭を撫でていた。

僕はいつも頭を撫でられることによつて平穏な心を取り戻していた。いつだつて攻撃的な僕から人に優しくできる僕へと戻つていったように感じられた。

ある日、怖い夢を見て眠れなくなったとき、例に漏れず優しく頭を撫でてくれた。そのとき三春姉ちゃんに聞いたことがある。どうして頭を撫でてくれるの？

三春姉ちゃんは笑つてこう答えた。

「私はそれしかけーちゃんを慰める方法を知らないの。それに、手を頭に当てることで、私の元気の素をけーちゃんに渡せるような気がして」

……どうやら、長いこと深く考え込んでいたらしい。三春姉ちゃんは諦めたのか、壁をたたく音は鳴りを潜めていた。とりあえず危機は去つたみたいだ。いま聞こえるのはパソコンの薄っぺらな作動音と、備え付けのガスストープが時折たてるチカチカ音だけだった。僕はとても気分を変えたかった。そして、考えることを放り投げてしまいたかった。そういうとき、普通だったらベッドに潜り込んで眠りにつく。けれど、眠ることがどうしても出来そうになかった。頭が冴えてしまっているのだ。

(そうだ、小説の続きを書こう)

ついさつき手が止まればかりだったけれど、もしかしたらこういう時こそ小説が進むのかもしれない。

ベッドから立ち上がり、パソコンのモニターの電源を付けて、回転椅子に腰を下ろした。

僕は小説を書く事が好きだった。昔から頭のなかでアレコレ考えることが好きだったし、物を作ることが好きだったから、いつの間にか気が付けば自分で小説を書くようになっていた。もともとバットエンドが大嫌いということもあったのだと思う。子供の頃から多くの物語を読んだり見えてきて、いつもバッドエンドをハッピーエンドに変える魔法の力があればいいのと思つてきた。

そう、僕はバッドエンドは決して書かないのだ。

モニターは、徐々に明るさを増して情報を鮮明に映すように努力している。

404 NOT FOUND ERROR

モニターには、そう映っていた。

三春お姉ちゃんが関わったらしい事件についてのウェブページを開いたら、こう表示された。何らかの問題が生じて、繋がらなかったのだらう。

ふと思いついて、違うウェブページを開いてみることにした。いつも見て回るページをお気に入り項目から選び出し、クリックしてみる。

404 NOT FOUND ERROR

そのあと数回違うページを試してみたが、どれも結果は同じだった。

このパソコンはもうどこにも繋がっていない。それがどうしたっていうんだ。

そのウィンドウを最小化にして、小説を保存していたフォルダをダブルクリックした。そのフォルダには、4つつほどのテキストファイルがあった。一番左は『父』、二番目は『母』、三番目は『姉』。

僕は一番右にある『浮遊霊』と題されているテキストファイルを迷わず開いた。ファイルが開き、文字が表示される。

社。 12月の月が綺麗な夜一時。ひとけのない山奥の忘れ去られた神社。

山奥では本当にいろんな音がする。古ぼけた神社であっては言うまでもない。



僕は何度も検分して、文章の破綻がしてないか確認した。やはり、物語は出だしが大事であると僕は考える。

最初に雰囲気や文章に持たせ、物語の終盤まで読者を引っ張っていくのだ。読者を引っ張ることが出来たのなら、作者の主張が顕著に現れる結末まで読ませることが出来るし、読者が物語を読み終わることが作者にとって一番の望むところだからである。

この『浮遊霊』の主人公は浮遊霊で、自分の境遇が悲惨なものにも関わらず神社で親友のためにお百度参りをする。そして物語の中盤、親友を助けることの出来る存在を知る。最後は、地縛霊の視点に切り替わる。実はこの地縛霊は主人公を陰から見守っていたのだ。

僕は、そんな主人公の願いを叶えるのにふさわしいイメージを探した。適任を見つげるのに苦労はしなかった。僕はその存在を知っている。

(やはり、三春姉ちゃんしか適任はいないだろう)

それ以外の適任は僕の頭の中で見つけることが出来なかった。もし、彼女以外に適任の存在がいるとしたら、それはどんな人物だろう。

(過去に僕を癒してくれた人物はいたのだろうか?)

急にこめかみがピリリと痛み出す。頭の中で何かが脳を圧迫しているような痛みだった。僕はとっさにこめかみを抑えてうずくまった。何が僕の頭の中で騒いでいるんだ?

だんだんとその何かはあらゆる方向へ移動し、駆け巡って頭のあちこちをつつつき始める。額へと、頬へと、頭頂部へと、何かが分裂し蠢いているのが痛みで分かる。

僕は叫んだ。痛みよりも、恐怖から逃れるためにいつの間にか僕は叫んでいた。やめてくれ、やめてくれ、やめてくれ！ 僕が何をしたっていうんだ！

何か突き刺すものを探した。なんでもいい、鉛筆でもハサミでも、突き刺せるものであればなんでも良い。尖ったものをこめかみに、

額に、頭頂部に、顎に、頭じゅうのあらゆるところに突き立てほじくりかえすのだ。

そのとき、壁が乾いた音をたてた。

こんこんこんこんこんこん。

僕は音をたてた壁のほうに振り返った。三春姉ちゃんが呼んでいる。こんこんという乾いた音は、さっきよりも強く鳴っていた。きつと、僕がドアを開けなかったせいだろう。もしかしたら怒っているのかもしれない。

ゆつくりとベッドに乗り出し、壁を三回叩いた。

こんこん。

数秒の沈黙のあと、壁の向こう側から声が聞えた。

けーちゃん、大丈夫？

僕の叫び声を聞いて、心配したみたいだ。それと、さっきの挙動で、僕が怒っていると感じたのもあるに違いない。

「大丈夫だよ。それよりこっちこそごめん。急にドアを閉めたの、驚いただろう？ ちょっとヘンになってたんだ」

そう、気が狂いそうなほどヘンになってたんだ。

僕がそう言い終わると、もう頭の痛みを感じてはいないことに気づいた。頭が痛くない。それどころか、頭がすうつとすつきりしたみたいだ。

「三春姉ちゃんの声を聞いて、安心したみたい。なんでもないよ」

ほんと！？ 嬉しい！ てつきりけーちゃんが私のこと嫌いになったのかと……思っちゃった。えへへ。

「そんなことないよ。落ち着いた。そういえば急にヘンな声あげちゃったね。それも、驚かしてごめん。突然頭が痛み出して……」

ううん。そんなことない。私こそ、けーちゃんと顔を合わせでお話したいっていう気持ち強要しちゃったみたいで。反省します、はい。

壁で隔てられた会話だけれども、三春姉ちゃんが落ち込んでいるのが手に取るように分かった。ごめん、三春姉ちゃん。

けーちゃんは、考えすぎることがあるから、きつとそのせいだね。頭をからっぽにするといいんじゃないかな？ ほら、それで出来ればおねーちゃんの事を考えてくれると嬉しいな、なんて。

三春姉ちゃんの言葉が胸に染みだ。どうしてこんな優しい姉を拒否したんだろう。こんな僕のことを考えてくれるじゃないか。

僕は、姉に対して申し訳なく思った。ごめん……と口をついて出そうになったが、それを遮るように、三春姉ちゃんは言葉を続けた。ごめんって思ってるんですよ。おねえちゃん分かってるよ。

でも、ごめんは禁止。だって、私たち姉弟でしょ？ かたっぽが辛くなったら、もうかたっぽが慰めることって、おねえちゃんは当たり前だと思つたのです。

壁の向うにちよこんと座っているパジャマ姿の三春姉ちゃんを想像して、微笑ましくなった。きつと壁の向うでも枕を抱いて笑っているのだろう。ごめんの代わりにありがとうと言つことにした。

「ありがとう。……そういえば気になってたんだけど、ドアで話したとき、ピンク色のヘアゴムをつけてたよね。三春姉ちゃんっていつも緑色のヘアゴムじゃなかったっけ」

そうだ、なぜ今までそれに気がつかなかったのだろう。ちゃんと目で確認したはずなのに。

ドアで話していたとき、間違いなくピンク色のヘアゴムを付けていた。僕のイメージでは緑色のヘアゴムを付けている三春姉ちゃんの印象が強かった。だから、多少違和感があったのだ。そうだ、そのちよつとの違和感が大きな違和感に膨れ上がり、僕を不安にさせたんだ。

部屋に数秒間の沈黙が漂った。その沈黙は僕を不思議に思わせた。なにか不味いことでも聞いてしまったのだろうか。

よく気がついたね。ヘアゴムについては答えにくいんだけど……やっぱり答えなきゃダメ……かな？

「答えにくいんだったら、無理しないでいいよ。……って言いたいところだけど、今回はかしは答えて欲しいかな。僕、三春姉ちゃん

のこともっと知りたいからさ」

嘘は言っていない。父さんから三春姉ちゃんは実は死んでいると聞かされて、ずっと三春姉ちゃんのが気になって仕方なかったのだ。だから、ここで全部答えてもらって安心したい。

じゃあ、私の全てを教えてあげる代わりに、一つおねえちゃんからのお願いを聞いて欲しいの。

「いいよ。僕に出来ることならなんでも聞くつもり。アイスでもなんでも買ってくるよ?」

ううん。そういうおつかいとかじゃなくて、私を部屋に入れて欲しいの。やっぱりダメかな。

僕は、想像以上に三春姉ちゃんが傷ついていることに気づいた。ドアをああやって閉めてしまったせいで、三春姉ちゃんは悲しんでいる。

「……わかった。部屋で待っているね」

三春姉ちゃんは、僕の頭痛を癒してくれた。そんな大事な存在を、どうしてまた拒否することが出来るだろう。

……それにしても、なぜ僕の頭は急に痛み出したんだ?

ここ一年間の自分すら分からないんだ。三春姉ちゃんのが分かるはずなんてない。だから、知ろうと行動を起こすことが必要だ。

三春姉ちゃんの、そして僕自身のことを知ることが必要だと思った。

5

三春姉ちゃんはすぐに僕の部屋にやってきた。

いつもと変わらない緑色のパジャマを着て、緑色のヘアゴムで髪をまとめていた。彼女は部屋に入ってくるなり僕に抱きついて背伸びした。僕は彼女の意図を読み取って膝を折ってやる。彼女は僕の頭を撫でて「ふふ」と声を漏らした。顔は見えないが、きっと彼女の顔にはあの可愛らしいえくぼが出来ているに違いないと思った。

その一連の動作はとても自然なことで僕の心を安心させる。三春姉ちゃんは、頭じゆうを這っている何かを撃退することが出来る不思議な力を持っている……のかもしれない。

数分ぐらいそうやっていただろうか。三春姉ちゃんは手をとめてパジャマの上着のポケットから何かを取り出し、手のひらにそれを乗せた。

それは白い紙で作られた折り鶴だった。

「どうしたの、それ」

「なんとなく作ったんだ。まだ一つしか作ってないけど、これあげるね」

僕は折り鶴を掴みあげてありがとうと言った。

「細かいところにちゃんと気づいてくれて、嬉しかったな。その折り鶴は私からのささやかなお礼。私だと思って大事に飾ってね」

その折り鶴を机の上に置く。そして、聞きたかったことを尋ねる。「そう、ヘアゴム。また緑色に戻っているけど、どうしてピンク色に変えたの？」

「そんなにヘンだったかな？」

「そんなことない。とつても女の子らしくて可愛かったよ。三春姉ちゃんだったら、どんな色だって似合うに決まってる。でも、普通だと思っていたことが違っていたら、いろいろなことが普通と違って見えてくるから聞いてみたんだ。そう、何が普通で何が普通じゃないのかが分からなくなってたんだ」

「ふうん」

三春姉ちゃんは顎に手を当てて、頭をかしげた。

「ねえ、ベッドに入っていいかな？」

「もちろん。でも、寝るときは部屋にちゃんと戻ってね」

僕の言葉には返事せず、ベッドに座りこむ。その仕草は、僕の知っている三春姉ちゃんそのものだった。どう見たって、僕の三春姉ちゃんだ。

彼女はそのまま枕に倒れ込む。前髪がベッドのシートにたたりと

垂れる。僕はその前髪から覗く大きな目を見つめた。やがて彼女は  
瞼を閉じた。

「けーちゃんのおいだ」

「当たり前だろう？ 僕以外の人のにおいが付いたら気持ち悪い  
よ。それに人のおいを嗅ぐなんてあんまりいい趣味じゃないよ」

その言葉にも三春姉ちゃんは反応しなかった。どうやら僕の部屋  
に入ってこれたことで、随分満足しているみたいだ。このまま彼女  
が寝てしまうのではないかと思ったから、僕は彼女の隣に座ること  
にした。

「ほら、寝ちゃだめだつてば」

脇腹をつかんで優しく揺らすと、三春姉ちゃんは僕のほうを向い  
て唇を動かした。僕の耳には彼女の声は届かなかつたらしい。何を  
言ったか聞き取れなかった。

「どうしたの？ 何か言った？」

「えへへ。大好きだよって言ったのです」

「ヘンな姉ちゃん」

そうだ、二人ともヘンだ。でも、どうして今更になってヘンだと  
感じ始めたのだろう。

ここまで劇的に状況の感じ方が変化したのだ。絶対になにか『き  
っかけ』のようなものがあるに違いない。

いつの間にか僕は、ことの始まりから今までに至る全てを三春姉  
ちゃんは知っているのではないか、と自然に思うようになっていた。  
そう、僕は半ば確信に近い感覚でそう思うようになっていた。本能  
で感じ取ったといてもいい。

「そろそろ教えてくれないかな」

「……知りたい？」

「僕はどうしても知る必要があると思うんだ。知ろうとするとどう  
してだかとっても辛い。けれど、それでも僕は三春姉ちゃんに対し  
て、このままずっと違和感を抱き続けて生きるわけにはいかない」

「……」

「姉ちゃんがもし一年前に死んだとしたなら、家族である僕がこの一年間ずっと知らないのは絶対におかしい。僕たちは家族でしよう？ 家族という大切な繋がりを僕は決して疑いたくないんだ。それに、どうやら僕の頭は上手にここ一年間を思い出せないらしい。」  
『空白の一年間』がどんな僕の頭を圧迫しているみたいだ」

三春姉ちゃんはすこし間を置いて言った。

「……約束だったものね」

「三春姉ちゃんは知っているんだね。ここ一年間の過去を」

そう、何らかの理由で誤魔化し続けていた僕の過去。

姉ちゃんが死んでからの、

突然、喉に何かがつまったような違和感を感じ、呼吸が困難になった。

声を出そうとするが、口がパクパク開いたり閉じたりするだけで、その口から出てくるのは空気が喉を通り抜けるびゅうという間抜けな音だけだ。

三春姉ちゃんは慌てて起き上がり、隣にいる僕に抱きついた。体はそんな僕たちの意思に関係なく悪化に向かって進行していく。

「考えちゃだめ！」

まず動悸が激しくなり、息苦しく感じた。僕は口に手をあてる。

夕飯に食べたものが口へ向かってせり上がり胃液と吐瀉物の独特な嫌な臭いが口の中に広がった。次に僕はその吐瀉物（ニンジンやブロッコリーなどのまだ消化しきっていない残骸）をゆっくりと噛み砕き、飲み込む。そして飲み下し終わってから肩をつかって深呼吸した。具合がとんでもなく悪い。頭が割れるように痛い。

「落ち着いて、ねえ。大丈夫、大丈夫だよ！ だから何も考えないで。私の手のひらのことだけを考えて……ほら、ね？」

聞くともなく彼女の声を耳に入れてみると、またあの頭のなかの何かが蠢き始めた。

ドクドク、ザワザワ、チクチクチク。

いつの間にか、三春姉ちゃんは僕の頭を撫でていた。そう、一生

懸命に、必死に。けれどその手つきは無造作なものではなく、ゆっくりと、優しく、いたわるようなものだった。

頭はだんだんと癒されていく。まるで本当に力の素を僕に与えているみたいだ。三春姉ちゃんの不思議な力は、あの時と同じように僕の頭の痛みを鎮めた。

それから、三春姉ちゃんは頭に手のひらを置いたまま、注意深く僕の体をベッドに倒して僕の右頬に唇を当てる。僕は落ち着きを取り戻すまでなされるがままだった。でも、どうやら状態は着実にいい方向へ向かっているみたいだ。

「……やっぱり知らないほうがいいのよ」

彼女はそう言った。だけど、残念ながら僕の頭はまだ完全と呼ぶには程遠く濁りきっていたから、今の僕には、この言葉を吐いた彼女の正体は三春姉ちゃんで正しいのか、それとも三春姉ちゃんの皮を被った何かなのか、それを判断する能力は持ち合わせていなかった。

ただ、次に僕の耳まで届いた言葉をぼつりと呟いたのは、僕が知っている「三春姉ちゃん」だったと確信を持って答えることが出来る。だって、とても悲しそうな表情を浮かべた彼女の顔が僕の目にしっかりと映ったから。

「辛い思いさせちゃって、ごめんね」

やはり僕は三春姉ちゃんのこと以上に、僕自身のことを知る必要があるみたいだった。

例えば、この世界に置ける僕の立ち位置とか。

もし、三春姉ちゃんが一年前に死んでいるのなら、僕と彼女が一緒に過ごしてきた空白の一年間は何だったろう。その空白を全て埋めて、僕の物語を完成させなければならぬ。

……そして僕はやはり受け止める必要がある。

日常が崩れ始めたきっかけを突き止めて、疑問の数々を僕の頭で判断するために。

ドクドク、ザワザワともう一度僕の頭の中で何かが蠢いた。



ドクドク、ザワザワ、チクチクチク。

×××

新聞 12月30日

遠藤家の闇 遠藤家の長女遠藤三春さんが一年前に飛び降り自殺

裂目町少年K事件に驚くべき情報が新たに追加された。

この事件の一年前の同日、同時刻（10年12月28日）に遠藤家の長女である遠藤三春（20）がビルの屋上から飛び降りて死亡したことが判明。

三春さんは亡くなる数ヶ月前から精神に異常をきたしており、診察の結果入院が必要と診断され病院に入院した。だが、入院初日の昼ごろ、昼食を持ってきた看護師の僅かな隙について脱走し、病院近辺のビルの屋上から飛び降りたとのこと。

事件があった12月28日は、三春さんの一周忌を終えた三日後で、その一周忌で父親と息子の間に何らかのトラブルがあったのではないかとみて、両方の事件の関連性を調べる方針で警察は調査を進めている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8968z/>

---

壁伝いISOS

2011年12月28日04時46分発行